98-278

脚本
どん底

マクシム・ゴーリキー作
昇曙夢譯

明治
43.10.28
内交

歌劇
どんぐりの
夜
夜の夢

此譯書をセルゲイ・エリセーエフ君に獻ず

序に代へて

『どん底』は千九百二年、恰度ゴーリキイの全盛時代の作で、是れが作者の文學的生涯に一新時期を劃し得たる傑作であることは凡ての批評家等の略ぼ一致して居る點である。『どん底』以前のゴーリキイの作物は、小說にせよ劇にせよ、凡て威力ある、自由なる人格の讃美として、單にローマン的の價値を有するに過ぎなかつた。でなければ『ドン・キホーテ』のやうな半神話的の、熱烈な想像力の所產として僅かに詩的價値を有するに止まつて居た。所が、『どん底』に至つては作の要件、思想の傾向、取材の範圍及び劇の形式に於て從來の作物とは餘程趣きが異つて居る。一例を取つて云ふと、ゴーリキイの前期に屬する劇作に『町の人』と云ふのがある。町の人の幸福と生活とを共に否定する目的で書かれた戲曲で、其中には町の人の窮屈な生活に對し

て、威力と剛氣と勇猛の意氣とに充ち滿ちた生活が寫されて居る。けれども此戯曲は僅かチェーホフの戯曲に幾分かの影響を與へた以外、其思想の要求に對しては社會より何等の反響も無かつた。所が『どん底』に於て作者は其迄罵倒し來つた文明社會を寫すのを止めて、全然下層社會の研究に向ひ、社會道德の見地に立つて、徹頭徹尾寫實的に筆を運んで居る。此點に於て『どん底』は純然たる社會劇と見做すべきもので、其社會的價値の大なることは、莫斯科の藝術座だけでも僅か二三年の間に數百回の興行を重ねたと云ふ事實に徴して見ても明かである。

ゴーリキイの創作に於ける如上の變遷が、作者の社會的乃至哲學的人生觀の變遷から直接將來して居ることは言ふまでもない。曾て個人主義とニーチェ教の代表者であつたゴーリキイは今では全然社會的道德の見地に移り、基督教に一歩を轉じて居るが、『どん底』は其根本觀念に於て則ち此思想の過度期を示したものである。個人主義と社會的道德の杆格、ニーチェ主義と

基督教主義の戰鬪は確かに此戯曲の中心骨子で、またさう見て行く所に此劇の意義があり、價値があり、面白味があるのだ。若し之を劇中の人物に就て云つたら、個人主義とニーチェ教の代表者は浮浪漢のサチンで、社會的道德と基督教の代表者は順禮のルカ老人である。勿論全篇を一貫して居るライトモチーブは何處までも個性の意識ではあるが、然し其れが一種の理想に對する憧憬の情と繋がつて居ることを看過してはならぬ。

『どん底』は其樣式より言へば近代諸威劇若くは西歐寫實劇に屬すべきもので、其中でも殊にハウプトマンの『織工』と能く似て居る。此二曲の中には第一主人公が無い。古典的意味に於けるタイプと云ふものも見えない。劇の人物としては二者共に衆人が現はれて居て、其中の主なる人物が比較的明瞭に書き分けられて居るに過ぎない。夫故に全篇同一歩調で、大した變化と云ふものがなく、舞臺面に現はるゝ人物の行動は凡て一の主なる傾向の下に支配されて居る。同じ意味に於て『どん底』は一面チェーホフの『三人姉妹』

こも比較することが出來る。勿論此二曲は取材の範圍に於て全く異つては居るが、然し『三人姉妹』の中にも矢張主人公がなく、タイプがなく、唯だ見果てぬ周圍の暗黑が全體の舞臺を左右して、絶望のモチーブは遂に「莫斯科へ！莫斯科へ！」と云ふ絶叫となつて終つて居る。是れと同じく『どん底』に出て居る木賃宿の住者等も何時かは奈落の底を去つて、明るい世の中に浮み得ると信じて居たのが、遂に其果敢ない境遇を出ることの出來ないと云ふことを意識するに至つて悲劇的の終りを告げて居る。

作劇上の技巧に於ても、『どん底』は近代劇作家等の所謂寫實劇に屬すべき作物である。かのローマン派の劇作家等が好んで用ゐたモノローグは『どん底』の何處にも見えない。劇に於てモノローグを廢したのは最初イブセンに依て試みられたことであるが、段々と實際生活を探つて見ると誰もモノローグを言ふやうな場合が無いと云ふ所から、ドラマの中にもモノローグを入れる必要は無いと云ふことになつて、遂に此事が近代劇作家等の

法則となるに至つたのである。けれどもゴーリキイの戯曲はトルストイ伯が評した通り之をドラマとして見ることは出來ない。其方から言つたら『どん底』には發端も無ければ葛藤もなく、大團圓も無い。其舞臺はドラマの意匠を實現しつゝ一幕毎に益々力を加えて、絶えず發展すると云ふ風のものでない。『どん底』に出て居る人物はルカ老人を除くの外皆な序幕より四幕目に至るまでドラマチカルな境遇に座しては居るが、さて其のカタストローフはと云ふと三幕目でも四幕目でも生じて居ると云ふ有樣で、全體の意匠が終始一貫して居ない。其他從來の劇作一般の法則に背いた點は局部局部に於ても能く見える。而して劇の主なる要素は科でなくして白である。殊に最初の二幕と詰の幕に於て然うである。夫故に從來の劇を見慣れた眼には左程の興味を感じないかも知れない。

チェーホフは露西亞の劇壇に自から稱して「生活よりの舞臺」と名けた戯曲を齎らしたが、ゴーリキイの『どん底』も則ち此の「生活よりの舞臺」の一つで

ある。斯種の戯曲は劇作の上で非常な極端に陥つたもので、在來の劇と比べると隨分思ひ切つた破格な事をして居る。斯種の戯曲は一幕若くは二三幕毎に意味が終結して居て、更に他の幕と事件上の連絡が無い、勿論全篇を打通した筋と云ふものもない。唯だ全體が同じ傾向、同じアトモスフィアの中に支配されて居るだけである。故に一幕宛別々に分割し、若くは二幕三幕を一緒にして見ることが出來得るばかりでなく、更に序幕を取除くことも出來れば、同時に詰の幕を取除くことも出來る。尤も其れが爲に幾分か劇全體の圓滿を害ふ恐れはあるが、然し讀者と觀客とは根本の思想を少しも傷くることなしに、優に舞臺上及び技術上の滿足を得ることが出來る。そこへ行くと、イブセンなどの劇はまだ筋を讀ませるやうな傾きがある。

劇中の人物は何れも苦しい慘めな目に遇つて意氣消沈の姿である。たとへ彼等に深く同情せる著者は、以前のやうに彼等を理想化こそせざれ、彼等の中に人間らしい性質、人の心を悲くやうな痕跡を認めないではないが、奈

何せん不幸悲慘の境遇は彼等を怨嗟、痛恨、獰猛、愚鈍の淵に投じて了つて、救濟の望みは全く絶えて居る。彼等はドストエフスキイの『死者の家』に描かれて居るやうな罪人の類でもない。彼等は最早何等の望みもなく、唯だ悲慘な想ひ出のうちに苦しんで居る過去の人々である。が、彼等は決して人の同情を求めない。勞働を蔑視して居る。勞働の恩惠と云ふものを更に信じない。それで居て、人生の意義を盛んに論議しながら、時に人生問題の根底に觸れ、人類の歴史を貫いて居る一大ムーヴメントを暗示して居る。同時に彼等は現在社會制度の敵である。けれども、斯かる反抗的意志を外にして、其の心の奥には絶えず何等かの積極的理想——たとへ其れは美しい幻影のやうなものではあるが——に對するトスカアが蟠まつて居る。ルカ老人は圖らずも木賃宿に是等の人々と出遇して、社會の犧牲として空しく幽暗の裡に沈淪して居る彼等の心底を振蕩した。而して是等の精神的亡者は各々ルカ老人に依て更新復活の道に呼出されたけれども、ルカ老人は積極的に何人をも復

活せしむることが出來なかつた。世にも恐ろしい阿鼻叫喚、苦悶苦鬪の眞ッ唯中にルカの如き篤信謙卑の老人が現はれたのは、却て間接には其所に投宿せる憂鬱質な旅役者の自殺を促がしたやうな結果になつて居る。つまり此の罪惡界の不幸な天才の濁つた心はルカ老人の公明な心と接するに堪えなかつたのであらう。要するに是等の宿泊者の多數はルカ老人の到來と教訓とに對して不滿であつた。彼等は寧ろ自分達の住んで居る木賃宿に精神的教化の降るのを欲しなかつた。『皆んなを何處へか誘つて置いて、自分は行先を言はなかつた……』と、彼等は老人の出發した後で不平を鳴らして居る。然し、其うちに彼等は自分達が生きながら葬られて居る浮世の墓穴が餘りに深くつて到底浮ぶ瀬の無いことを益々强く感ずるやうになつた。

こゝでルカ老人に就て尙ほ一言附加えて置きたい。サチンや其他の人物は皆な純然たるゴーリキィ式のタィプであるが、ルカ老人は必ずしもゴー

リキィの作物に於ける理想的タイプではない。是れは露西亞文學に於て長い歴史を有する所謂露西亞風の義人である。チクラーソフの『ヴラス』の主人公と云ひ、ドストエーフスキィの『カラマゾフの兄弟』中に出て居るザシマと云ひ、將たトルストイ伯の『闇の威力』に於けるアキムと云ひ、皆な是れルカ老人と同じ型に屬すべき義人であつて、國民性の擁護者たる露國文豪等が好んで描いた純然たる露西亞式のタイプである。されば北歐文學に於ても、西歐文學に於ても、斯かるタイプを發見することは容易でないが、露國に於て斯種の正直爺さんのタイプはザラにある。差當りオルソドックスの田舍牧師や修士などが其れだ。先づ斯種の義人の根本性格として最も著しいのは罪惡に對する消極的態度である。卽ち罪惡に對して何處までも反抗すると云ふ意志でなく、可成罪惡を避けんとする傾向を謂ふのである。それから同胞に對する愛の宣傳、謙遜、運命に服すること、神に對する無我愛、義なる生活の追窮等が其重なる性質である。ルカ老人に於ては凡ての義人に通

ずる此の一般性格に加ふるに、幾分か異端的人生觀と個人的性質とが結び付いて居る。

けれども、ルカ老人は木賃宿に於て何等善良な積極的效果を生ずることが出來なかつた。此場合に於けるルカの役目はトルストイ伯の『闇の威力』に於けるアキムの役目に及ばざること遠しである。アキムは罪に染つたニキタの眠れる良心を覺醒して、其良心が公開懺悔の方法で淨め得られること云ふことを彼に悟らしめ、斯くて作物の倫理的觀念の勝利に向つて大に力を致して居る。夫故に『闇の威力』を讀むと我知らず慰安の感に打たれるが『どん底』を讀むと、心中何となく壓迫されてるやうな、重苦しい、暗い印象を受ける。それに全體の空氣がドヨヨンとして、始終曇天の下に居るやうな氣持が離れない。其れが爲め『どん底』は樂天的要素よりも厭世的要素が多分を占めて居るやうに思はれる。尚ほ此劇の二幕目と四幕目に出て居る歌は烏を歌つたウォルガ地方の民謠の譜を取つて來て、作者が新たに歌詞を附

したのださうだが、其沈痛悲壯なメローディが亦劇の厭世的調子を高める一の要素になつて居る。精しくは樂譜に就いて御覽を願ひたい。

・終りに臨み、本書の譯を助力せられたる友人柳瀨樂外君に對し、感謝の意を表す。

明治四十三年十月一日

昇曙夢

脚本

どん底

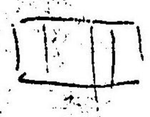
人物

ミハイル・コスツイリョフ（木賃宿の亭主、五十四歳）
ワシリーサ・カールポヴナ（妻、二十六歳）
ナターシャ（ワシリーサの妹、二十歳）
メドウェデフ（叔父、警官、五十歳）
ワシカ・ペペル（二十八歳）
クレシチ・ミトウリチ（錠前師、四十歳）
アンナ（錠前師の妻、三十歳）
ナスチャ（娼女、二十四歳）

クワシニャ　（肉入饅頭賣、四十歳位）
ブブノフ　（帽子匠、四十五歳）
サチン　（四十歳位）
役者　（同　上）
男爵　（三十六歳）
ルカ　（巡禮、六十歳）
アリョシカ　（靴匠、二十歳）
クリウォイ・ゾーブ　（擔夫）
鞋靼人アサン　（同上）
其他仕出し　（無賴漢數名）

第一幕

洞穴に似たる地下室。壁の落ちた煤た石造の重くるしい圓天井。



觀客席及び右方にある角窓より下方に向つて斜に光線走る。室の右手の隅は薄き隔板にて仕切らる。此處はペペルの部屋で、此部屋の戸口の傍に帽子匠ブブノフの臥床がある。又左手の隅には大なる露西亞式の据付煖爐がある。同じ左手の石造の隔壁に臺所へ通ふ扉がある。臺所には肉入饅頭屋のクワシニャと、男爵と、ナスチャが住でゐる。煖爐と扉との間なる壁に幅廣き寢臺が、不潔な更紗の帷帳に覆はれてある。壁に沿ふて數個の寢臺が並ぶ。左方の壁の前に壓搾機と鐵砧とを据付けた木頭がある。之と列んだ小形の木頭に腰を卸し、鍵を古い錠前に合せつゝ鐵砧に向つたのは錠前屋のクレ

シチである。其の足元には種々の鍵を插み込んだ大きな針金の束と、處々孔の穿いた鐵葉の自沸鑵、鎚、小鋸など横はる。部屋の中央には古ぼけた白木の大机と、二脚の椅子、床几が一脚。何れも汚れをる。此の大机の前の自沸鑵の側にて、饅頭屋のクワシニャは茶の世話をなし、男爵は黒麵麭を嚙る。ナスチャは床几に腰を掛け、机に肘を凭せながら古本を讀む。帷帳を釣つた寢臺には錠前屋の神さんのアンナが咳をしながら横はつてゐる。帽子匠のブブノフは臥床に腰打ち掛け、帽子型をしつかと膝に載せかけ、解放した古ズボンを之に合せて、裁方に苦心の最中。其の足元には、帽子の眉庇を造る爲め、古帽子から裂き取つた板紙だの、油布だのが散らかつてゐる。サチンは今目を覺ましたばかりで、臥床の中で呶鳴つてゐる。煖爐の上では役者が咳をしてゐる。勿論其姿は見えない。時は早春の朝。

男　爵

それから？

クワシニャ

いやだよ。最うこれでお仕舞なんだから、彼方へお出で。私は其を皆な經驗て來たんだよ……。だから私はもう、百匹の燒蝦を持ッて來たつて人の神さんなんぞにやア爲りアしないよ。

ブブノフ

（サチンに向ひ）

汝え、何を其樣に唸りやがるんでい？

（サチンはまだ呶鳴つてゐる）

クワシニャ　斯うやつて居りや、これで私は自由ですもの。誰一人頭を押すんぢやなしさ……。それを誰が男の奴隷になんぞなつて、他人のところへ籍なんぞ入れて、堪るもんか！フン、眞平さ。たとへ私を貰ふと云ふ人が、亞米利加の皇太子様だつたつて、私はお嫁になんか行きはしませんからね え。

クレシチ　嘘吐け！

クワシニャ　何だつてえ？

クレシチ

嘘だつてことよ。メドゥウェデフと夫婦になるくせに……。

男爵　（ナスチャから讀んでる本を奪ひ取り、其表紙を見て）『くされ縁』か……。

（とカラ〳〵笑ふ）

ナスチャ　（手を差伸べて）お返しよ……。お返しつたらねえ。惡戯をしちやいけないよ、よッ。

男爵　（本を高く振廻しつゝナスチャを見る）

クワシニャ

（クレシチに向ひ）

此の赤山羊奴！嘘ばッかり言ッてらァ！、よくも其様な無禮な事が言へたもんだね？

男爵

（本でナスチャの頭を撲ち）

ナスチャ！お前も隨分馬鹿だなァ……。

ナスチャ

お返しッたらさ。

（と本を取り返す）

クレシチ

大した奥方になつたもんだね……。汝えメドウェデフと夫婦になるんだらう……。其事ばかり待つてるくせに……。

クワシニャ

當然さ！夫婦になりやどうしたと云ふのさ。お前さんこそ、神さんを虐めて半殺しにしてゐるくせに……。

クレシチ

默れ！このよぼ犬奴！汝等の知つたこッぢやねえや……。

クワシニャ

そら、矢張本當の事を言はれると厭がるぢやないか！

男爵

始まつたぞ！ナスチャ！お前何處に居るんだい？

ナスチャ

（頭を擧げずに）

ア、……、蒼蠅いッてばねえ。

アンナ

（帷帳から首を突出して）

また始まつたねえ！後生だから騒がないでねえ……。皆さん、何卒静かにして下さいよ！

クレシチ

お嘆しが始まッたぞ！

アンナ

毎日のことだもの……。何卒死ぬ時ばかりも静かに死なせて下さいよ。

ブブノフ

騒いだッて死ぬ邪魔にはなるめえ。

クワシニャ

（アンナの處へ行き）

お前さん、まア何だッてあんな悪黨と一緒になつたんだらうねえ。

アンナ

構はないで彼方へ行ッて下さいよ……。

クワシニャ

お前さんは何てまア我慢強い人だらう！どうだね、少たア胸部が快いかね？

男爵

おい、クワシニャ！最う市場へ行く時分だぜ。

クワシニャ

今直ぐ行くよ。（とアンナに向ひ）肉入饅頭の出來たての溫かいのを上げるがね、お前さん食べて見る氣はないかい？

アンナ

有難う！不用食べたッて仕様がないんですもの。

クワシニャ　ホントーニ人らー。

でも、一つ食べて御覽な。溫かいものは病氣に好いんだから。私はお前さんの分を茶椀に殘して置くからね、後で食べたくなつたらお食りね。さア旦那參りませう……。（と今度はクレシチに向ひ）この惡黨奴！

（と勝手の方へ去る）

アンナ

（咳をしながら）

あゝ、あゝ！

男爵

（ナスチャの後頭部を輕くつッ突いて）

馬鹿！其樣物を讀むのはお止しと言ふに。

ナスチャ

蒼蠅いつてばねえ……（と呟く）私は何もお前さんの邪魔をしやしないよ。

（男爵舌打しながらクワシニャの跡に蹤いて去る）

サチン

（寢臺より立ち上り）

昨日、俺を打つたのは誰だい？

ブブノフ

誰が打つたつて、好いぢやねえか？

サチン

そりや然うだが、一體何故打ちやがつたんだ？

ブブノフ

汝、賭博を行つたらう！

サチン　行つたとも。

ブブノフ　其様事を行るから打たれるんだ。

サチン　畜生奴！

役者　（据付煖爐の上より首を突出し）今に見ろ、汝死ばる程打ちのめされるから……。

サチン　馬鹿！。

役者　何が馬鹿だい？

サチン　何がつて人間は二度と死ばれるもんぢやねえや。

役者　（暫らく默つて）何故、死ばれねえか……俺ア解らねえ。

クレシチ　やい、煖爐から下りて來やがれ！そして部屋でも掃除しろ！……。何を氣取つてゐやがるんでい。

役者　大きにお世話だ。

クレシチ

今にワシリーサが歸つたら、大きにお世話だか何だか分らァ。

役者

歸らうと歸るまいと、ワシリーサがなんだ。それに、今日は一體男爵の掃除番なんだ……、おい男爵！

男爵

（勝手より出で來り）

俺にや部屋なんか掃除する間が無えや……、俺は、之からクワシニャと市場へ行くんだ。

役者

其樣な事は俺の知つた事ぢやねえや……。行きたきや懲役にでも何でも勝手に行きねえ……。だが、今日の掃除は汝の番だ……。俺ア

他人の分まで働きやしねえぞ。

男爵

何だと、喧かましいや！ナスチャが掃除して呉れらァ……おい、くされ縁ちやん、しつかりおしよ。

（ナスチャの持つてる本を奪ひ取る）

ナスチャ

（立ち上り）

なに用があるの？およこしつてばさ、何て惡戯者なんだらう。それでも旦那樣のつもりかい。

男爵

（本を返し）

善い娘だ、俺の代りに掃除をしてお呉れ……、いゝだらう？……。

ナスチャ
（蛮所へ行きつゝ）
人を馬鹿にしてゐるよ、何だと思つてるんだ。

クワシニャ
（蛮所の戸口にて男爵に向ひ）
お前さん行きませうよ。お前さんがゐないだッて、役者が掃除して呉れらァね！、おい！役者さん、お前さんも人が掃除してお呉れッて云ふのに、爲てあげるがいゝぢや無いかね。別段骨が折れるわけでもあるまいにさ。

役者
ヘン、何時でも俺ばつかりか……、何のこッだ！

男爵

（天秤で蛮所から籠を搬ぎ出す、籠の中には襤褸で蔽はれた大壺がある）
今日は何だか重いぞ。

サチン
生意氣に男爵なんかに生れて來るからさ。

クワシニャ
（役者に向ひ）
お前さん掃除をするんですよ、可いかね。
（男爵を先に立てゝ玄關へ出る）

役者
（煖爐より降り）
塵芥を吸ふのは俺にや毒だ、（と傲慢に）俺のオルガニーズムはアルコール中毒てえ奴だ。

（と寢臺に腰を掛けて思ひに沈む）

サチン　オルガニーズム……オルガーノン……。

アンナ　ミトゥリチさん！

（とわが夫のクレシチを呼ぶ）

クレシチ　何だ？蒼蠅い。

アンナ　彼處にね、クワシニャさんが私に置いて行つた肉饅頭が有るから……

クレシチ　お前さんお食べな。

（アンナの傍へ寄り）

お前は食べないのか？

アンナ　食べたか無いんですよ……。食べたつて仕樣がないんですもの。お前さんは稼ぐ人だから、お前さんは食べなきやいけませんよ。

クレシチ　何が怖いんだ、怖がるこたア無えぢやねえか……。なにも全快る的が無いと云ふぢやなし……。

アンナ　食べてお出でなさい。私は苦しいの……。私はもう直きに……。

クレシチ　其樣こたア無えってばな……。また起きられるやうな時が來らアな。

（と壁所へ去る）

役者　（急に目を覺ました樣に大聲で）昨日病院へ行つた處が醫者がな、俺のオルガニーズムは全然アルコールでぶちこはれてると云やがつたぜ。

サチン　オルガーノン……。

（と笑ひつゝ言ふ）

役者　（強き語氣にて）オルガーノンぢやねえ、オルガニーズムだい。

サチン

この毛唐奴……。

役者　（サチンに向ひ、焦つた相に手を振り）何を混つ返しやがるんだい。俺ア眞面目で言つてるんだ……。宜いか若しオルガニーズムが悪いッて事になると掃除なんぞするなア俺らの體に障る……。塵埃を吸ふなア悪いに極つてるぢやねえか。

サチン　衞生長壽法か……、ハ、、、、、。

ブブノフ　汝何を呻つてゐやがるんでい？

サチン　何をつて學者の言葉をよ……。まだ〳〵知つてるぞ！、いいか、超自然

的と來やがら……。

ブブノフ　そりや何様こッだ？

サチン　知らねえや……、お忘れ申した……。

ブブノフ　ちやァ、何だつて其様な事を言ふんだ？

サチン　何て云ふ事もあるもんか、俺ア、人間の云ふ言葉なんぞ、悉な聞きあきッ了つたんだ。俺達の使つてる言葉なんか、大概もう千度づゝも聽いたらうよ……。

役者

『ハムレット』と云ふ芝居の中にさ、「言葉、言葉、言葉！」と云ふ事が言つてあるがね、や、素敵なもんだぜ……俺ア斯う見えても此の芝居で以て墓堀の役を演つたもんだ。

クレシチ　（奥所より出で來て）何時になつたら貴様、掃除役を勤めるんだ？

役者　汝なんかの知つたこッちやねえや。（と手で自分の胸部を打ち）オフエリヤよ、おゝ其の祈禱の中に我を記憶せよ！

（何處か舞臺の後の方で遠く微かな響、呼聲、警官の呼子聞ゆ。クレシチは仕事に取掛り、鋸で喧ましく何物かを挽く）

サチン

俺ア譯の解らねえ稀有しい言葉が好きなんだ……。まだ子供の時分に俺らは電信局に勤めて隨分夥多ある本を讀んだもんだ。

ブブノフ

汝電信の技手だつたんかい？

サチン

然うとも。其の時分にや好い本が夥多あつた。それになア面白え言葉も大したもんだつた……。これで俺らは敎育のある人間なんだ。どうだ知るめえ。

ブブノフ

聞いたとも！……、もう百度も聞かされたんだ。ふん、電信技手がなんだ。何も豪え事は無えぢやねえか。俺らだつて斯う見えてもな毛皮匠さんだ。自分で工場を持つてよ、自分で毛皮なぞ染めてゐたもんだから、染

料でもつて手から肱から眞黄色さ。や、其黄色さ加減たら無かッたせ。俺らは然う思つたね、これぢや死ぬまで落ちる事ぢやあるめえ、死ぬ時は黄色い手をしたなり死ぬんだなと……。だが見ねえ、今では此樣な手になつ了つた。たゞ此の穢なさ加減にや恐れるよ。

サチン

それがどうしたつて云ふんだ？

ブブノフ

どうするものか、それ丈の事よ。

サチン

ぢやア、汝何だつてそんな御詫を竝べやがるんでい。

ブブノフ

何もあるもんか、たゞまア、少許言つて見たまでさ！だがなア、世の中ッ

てえ物ア、外面許か飾つた處で終にやべろ〳〵に剝つ了ふまでだねえ、然うぢやねえか！

サチン　ところで、俺様は骨ッ節が痛んでならねえ。

役者　（膝を抱へて座つてゐたが）教育なんかつまらねえもんだ！なんでも一番大切なのは天才てえ奴よ。俺はある役者を知つてゐるが、其奴め、科白などはやつと拾ひ讀みで覺える位だつたが、さア、演らせて見ると上手で、其巧さ加減と云つたら、お前見物の拍手喝采で劇場が割れつ返る様な騒ぎぢやねえか。

サチン　やい、ブブノフ、五百呉れねえか！

ブブノフ　俺ん處にやすつかりで二百きや無え。

役者　だから俺はさう思ふんだ、人間は天才がなくッちや豪物にやなれねえッて。そこで天才てえ奴は自分と云ふものと自分の技倆を信ずるものだ。

サチン　やい！五百呉んろッてことよ。俺は汝が天才で、豪傑で、鰐魚で、警察吏だッて事まで、ちやんと承知してゐらアな。やい、クレシチ、五百呉れねえか。

クレシチ　何吐かしやがるんでい！汝達に呉れて、おたまりこぶしがあるもんけえ。

サチン　何だい、啞鳴りやがッて、汝ん處に錙一文も無いッてこたア、俺様アすつかり見透してござらア。

アンナ　ミトウリチさん、あゝ、苦しいよ、苦しいッたら……。

クレシチ　其様な事を言つたつて、俺にアどうも仕様がねえ。

ブブノフ　出口の戸を開けねえな。

クレシチ　お生憎さまだ！汝は寢臺に腰を掛けてゐるからいゝが、俺らは床に坐つてゐるんだ。汝の場所を俺に貸しねえ、それから戸でも開けねえ、それ

でなくッてさへ俺ア風を引いてゐるんだ。

ブブノフ　（落著き拂ひ）俺は戸なんぞ開けなくつッても可いんだが……、たゞ、汝の鳴が息苦しいと言ふからよ。

クレシチ　（滋々と）誰が何てッたッて可いぢやねえか、打棄ッて置きねえ。

サチン　頭がガン〳〵しやがる。あゝ、何だつて人間てえ奴は、お互ひに人の頭なんか毆るんかな。

ブブノフ

頭を殴るばかりぢやねえ、身體中何處でも、手當り次第殴るからたまらねえや。（と立上り）どら一つ絲でも買ひに行かう……。時に亭主の野郎今日は死ばりでもした様に遣つて來やがらねえな。（退場）

（アンナ咳をする。サチン兩手を頭の後にして、身動きもせず横たはつてゐる）

役　者　（覗き〜つて四邊を見廻し、アンナの傍へ行き）どうだ、そんなに悪いかい？

アンナ　息苦しくつてねえ！

役　者　玄關へ伴れて行ッてやるがどうだ。さア、まア起きねえ。（とアンナを助け起し、其の用になんだとも正體の分らなくなつた毛皮をひつ掛けて玄關に伴れて行く）

さア〜、しつかりしねえ、俺だつて、これで病人だぜ……、しかもアルコール中毒てえ奴だ……。

コスツイリョフ　（戸口にて）やア散歩かね、牡山羊と牝山羊で好一對なこつた……。

役　者　やい、そこ退かねえか。御病人様のお通りが見えねんかい？

コスツイリョフ　お通んなさい。（と鼻聲でなにか抹香臭い歌を唱ひながら、懸念さうに家の中を見廻し、何やらに首を傾げ、ペペルの部屋に人の話聲のするのを窃と立聞する。錠前屋のクレシチは噪しく鍵を鳴し鋸を挽きながらも頻越しに亭主の後姿を視る）ガリ〜やつて居やがるな？

クレシチ

なんだと？

コスツイリョフ

ガリ〳〵やつてると云つたのさ。(間)それは然うと何を訊かうと思つたけ。(と早口に言ひ、急に低聲になつて)おい、俺の噂は來なかつたか。

クレシチ

俺らア見なかつた。

コスツイリョフ

(癪ッとベベルの部屋の戸に立寄り、錠前屋の方を見返りながら)

お前は一ト月二兩の癖に、大變に場所を占つて居るぢやねえか。寢臺で場所を占つた上に、坐つて亦場所を占るなんて、それぢやもう五貫も貰はなきや間に合はねえぜ。全くの事だ。もう五貫だけ追加さなきやならねえ。

クレシチ

そうさ、それよりか汝俺の首に絞板を掛けて、一思ひに絞殺してしまひねえ。もう直きに横死つちまうんだ。五貫々々て、そんな吝なことばかり考へてゐやがらア。

コスツイリョフ

お前を殺して、奈何なるもんか。誰の益になるんだ。下らない事ア言はんもんだぜ。まア、長く生きて愉快に暮すさ。俺はお前に五貫增して貰つてよ、御燈明の油でも買てな、神樣に捧げやうッてんだ。さうすりや、そら、俺の罪滅しにもならうしな、またお前の罪滅しにもならうと云ふんだ。お前は、もう自分の罪惡なんてこたア少ッとも考へまい？さうだらう？どうもお前は罪深い人だよ。見ねえ。お前が罪な事をやるお蔭でお前の

嗅はあの通りの病氣だ誰一人お前んとこを好い人と思つてるものが有るか、可愛がつてる者も有りや爲まい、尊敬つてる者だッて有りやしねえよ、一體お前は其の職業からして宜く無え、ギリ〳〵ッて、喧噪ましくばつかりしやがつて――皆んなに迷惑を掛けるばかりぢやねえか。

クレシチ

（叫ぶ）

なんだ、汝俺に喧嘩を賣りに來たんか。

（サチン聲高く呻る）

コスツイリョフ

（戰慄き）

アッ、なんだ、おい吃驚するぢやねえか。

役者

（登場して）

阿魔ちよを玄關に陣取らして、寒くねえ樣に能くくるんでやつた……。

コスツイリョフ

そりや善い事をした。お前は感心な人間だ。こんなこたア皆なお前の勘定の内に入らふと云ふものだ。

役者

そりや何時の勘定によ。

コスツイリョフ

彼の世に行つてからさ。彼の世に行けば、此の世で爲た事に就いて、どんな事でも皆んな、其の報酬と云ふものがあるんだ。

役者

そこをどうだ。此の世で一ッ、俺に褒美を呉れねえか。

コスツイリョフ

其麼事が奈何して俺達に出來るもんか。

役者

出來ねえ事も有るめえ。俺の借金の半分を空にしてしまいねえ。

コスツイリョフ

ハハア、お前さんは笑談を言つて居るな。嘲弄ッちや困るよ。この、心の善良と云ふものはな、金錢なんかと比べ物にやならねえ者だ。可いか、善といふものは、いろんな德よりも可いものだ。そこで、お前さんの借金は借金で、それとは事が違つてゐる。可いか、それだから、それは返濟しなきやならねえ。此爺に爲るその善行と云ふものは、只でしなきや功德が無え。

役者

汝え仲々喰へねえ爺だなア……。（と臺所へ立去る）

（クレシチ立上り玄關へ行く）

コスツイリョフ

（サチンに向ひ）

ガリ〳〵亡者奴、到頭逃げちやつた。ハ、、、、奴さん俺んとこを嫌つてると見える。

サチン

ふん、惡魔でなくて誰が汝を好くもんかい。

コスツイリョフ

（笑ひつゝ）

お前は餘程口が惡いな！。これでも俺はな、お前達を可愛がつてさ、不幸な、行き處の無えやくざ者と思つてるんだけれどなア！（と急に早口に）

時にワシカは家に居るのかい？。

サチン
入つて御覽な。
コスツイリョフ
（戸口に近づき、戸を敲く）
おい、ワシカさん！
（役者臺所の戸口より現はれ、口をもぐ〳〵動かして居る）
ペペル
何奴だい？
コスツイリョフ
俺だ、俺だよ、ワシカさん。
ペペル
何の用だ。

コスツイリョフ
（少し立離れ）
戸を開けねえかい。
サチン
（宿の亭主には目も觸れず）
奴さんが戸を開けると、阿魔が室内にへーッてるから面白えて……。
（役者鼻を鳴らす）
コスツイリョフ
（心安からぬ態、低聲にて）
何だつて？ 誰が居るんだ？ おい、言はねえか。
サチン
なにッ！ 何を吐しやがるんでい？

コスツイリョフ
今お前何んと言つたい？
サチン
なんでも無えや、獨語を言つたんだい。
コスツイリョフ
しつかりしねえ！笑談にも程があらアな、おい、おいワシカさん！
ペペル
（戸を開けながら）
なんだい、騒々しい。
コスツイリョフ
（部屋を覗き込み）
俺だ、お前さん見てる通り、俺だよ。

ペペル
お錢を持つて來たんかい。
コスツイリョフ
俺はお前に用が有るんだ。
ペペル
お錢を持つて來たかと云ふに。
コスツイリョフ
何のお錢だい？まつたく。
ペペル
七兩のお錢さ。時計の代だ。さア、よこしねえ。
コスツイリョフ
何んな時計？お前何うかしたのか……。

ペペル

惚けやがるない。昨日人の見て居る前で、汝にちやんと時計を十兩で賣つて、三兩を受取つたばかりだ。あとの七兩をよこせと言ふんだ。なにを其樣に眼ばかりパチクリさせやがるんでい。そこらをまご〳〵歩き廻つて、人に迷惑を掛ける事ばかりしやがつて、自分の爲る事つたら爪の垢程も爲やしねえ……。

コスツイリョフ

まア〳〵、然う怒るなよ……、時に時計だて、一體あの時計は……。

サチン

盜んで來たのよ……。

コスツイリョフ

（勿體ぶって）

俺ア賊品は受取らんよ……。奈何してお前受取れるもんか……。

ペペル

（亭主の肩を捉へ）

何で吠えやがるんでえ？汝何の用があるんでえ……。

コスツイリョフ

う、うん……俺は、なゝなんにも用はねえ。お前さんが、そゝそんなに怒るんなら、おゝ俺は歸るよ……。

ペペル

おゝ、歸れ、早く歸つて、金を持つて來やがれ。

コスツイリョフ

（退場しつゝ）

あゝ、なんて云ふ奴等だらう、手が附けられねえ。

役者

やア、喜劇だ！

サチン

豪勢だなア。これで辛つと溜飲が下がつた。

ペペル

一體あの兵六玉、何しに來やがつたらう。

サチン

（笑ひながら）

何しに來たか解らねえんかい？嗅を探しに來たのよ……。汝えまたなんだつて彼奴を打殺してしまはねえんだ。

ペペル

俺ら、そんな事で身の詰る樣な馬鹿はしねえ。

サチン

馬鹿な事が有るもんかね。一つ巧くやりやり、ワシリーサが嗅になつて、俺達の爲にも御亭主樣にならうと云ふもんだ。

ペペル

つまらねえ事を言ふなよ汝。俺の懷中ばかり狙つてゐやがると思つたら俺まで呑まうとしてけつかるんだな（と寢臺に腰を卸し）糞爺奴、折角眠てるところを醒しやがつて……。俺ら恰度好い夢を見て居たんだ。何んだか釣を爲て居ると素的に大きな鯽魚が掛つたッけ……、まア、夢でゞも無けりや、あんな大きな鯽魚は見られやしねえ……。そこで俺はな、そいつを釣竿で引き寄せたが、絲がぷつ切れさうでならねえから、魚籠を用意してしやくらうと思つたら、見ねえな……。

サチン

それは鯽魚ぢやなくッて、ワシリーサだ、

役者　ワシリーサなんざ、奴さん、最うとつくの昔に釣り込んでゐらァな。

ペペル　（怒って）去せァがれ、ワシリーサの阿魔も馬鹿なら、汝等も對手にならねえ。

クレシチ　（玄關より入り來り）寒い〳〵、馬鹿に寒い。

役者　汝、なぜ嚊を伴れて來ねえんだ。凍えつちまうぞ。

クレシチ　嚊はナターシャが來て、臺所へ伴れて行つたよ。

役者　また糞爺に逐放はれるぞ。

クレシチ　（仕事に取掛り）なアに、今にナターシャが伴れて來て呉れるさ。

サチン　おい、ワシカの兄い、鳥目五百呉れねえか。

役者　（サチンに向ひ）なんだな……五百ばつこ、客くせえ。おい、ワシカの大將、俺等に二貫呉れねえな。

ペペル　愚圖々々して居ると、今に一兩呉れなんて言ひ出しやがるから早く呉れてやるべえ、そら。

サチン　豪勢だぜ。世の中に、泥棒様位豪え人間は無えなア。

クレシチ（不興氣に）　それは泥棒なんざ金錢を拵へるなア譯無えさ。何も働いて拵へるんぢやねえからな。

サチン　うまく金を儲ける奴も隨分有るが、金離れのいゝ奴と來ちや捜しても無え、ハヽニ働かねえと言ふんか、ハヽン働く事が愉快であつて見ろ、俺らだ

つて、そりや働くかも、知れねえぜ。いゝか、かも知れねえつてんだよ。働くつて事が愉快なもので、生活が善良いもんだらだぞ。所がね、勞働が義務的で、生活が奴隷的だから仕様がねえや、のう。（と役者に向ひ）さア、サルダナッパル！出掛けやう！

役者　行かう、ナウホドノッソル！四萬人の酔漢の様に飲まう。

（兩人退場する）

ペペル（欠伸をなし、錠前屋に向つて）　嗅の具合はどうだい。

クレシチ　もう長いこたア……。

（と默る）

ペペル

斯うして汝んとこを視て居るのに、汝え無暗にガヤ〳〵鳴らすぢやねえか。

クレシチ

ぢやァ奈何すりやいゝんだ？

ペペル

どうしろと言ふんぢや無えが。

クレシチ

だつて、何をして飯を食やいゝんだね？

ペペル

何をしてッて皆んな生きてるぢやねえか？

クレシチ

彼奴等かね、彼奴等は、あれでも人間の仲間に入れるかねあんな惡黨や無能漢は、まあ、人間とは云へめえ。斯う見えたつて俺は勞働者だ……。俺らはな彼奴等なぞ見るのも穢らはしいよ。これでも俺ら幼少い時から働らいて飯を食つて來たんだ。汝はさ、俺がね一度こんな所へ來たら、もう浮ばれつこが無えと思つてゐるだらうが、いまに見ねえ、飛び出して見せるから。どんな事を仕ても飛び出さァ……。まあ見て居ねえ、嗚が死んだら何うするか……。俺ら彼是半年ばかりしか此所に居ねえがな、最う六年も燻ぶつてる樣な氣がする。

ペペル

此所に居る人間で、誰も汝より惡い奴は居やしねえ。見當違いな事を言ふなよ。

クレシチ

なに、惡く無えつて？だけどさ、誰も名譽と云ふ事も考へて居やしないし、良心も持つて居やしないでさ、只最うたはいなく日を送つて居る徒輩ぢやねえか。

ペペル

（平氣に）

、なにを馬鹿な、名譽も良心もあつたものか。そんなものは、靴の代用にもなるもんぢや無え。名譽だの、良心だのつてなア、ありや大盡とか有力家の使ふ道具だ。

ブブノフ

（登場して）

おゝ寒い、寒い。

ペペル

やい！ブブノフの野郎、汝、良心を持つてるかい。

ブブノフ

なに良心だ？

ペペル

さうよ。

ブブノフ

ふざけるない？俺らまだ金滿家様にやならねえ。

ペペル

俺もさう言つたんだ、名譽だの、良心だの云ふものは、金滿家に入用だつて。然うだらう、するとクレシチの野郎、俺に反對へしてよ、いや、さうぢや無え、汝等には良心が無えなんて吐しやがる……。

ブブノフ

奴、どうしたつてんだらう。金でも借り出す氣かな。

ペペル

借ねえたつて、彼奴は、自分のを夥多溜めてらァな。

ブブノフ

それぢや賣りつけてえんだらう。馬鹿にしてやがら。誰があんな奴のも
のなんか……。そこに有る破損れ畫額なら、俺らだつて買てもいゝが、
それもお錢は拂はねえ。

ペペル

(錠前屋を訓すやうに)

汝もよつぽど鈍間だ。良心はどんなもんだか、よく、サチンにでも聽いて
見ねえ……それとも、男爵に聞いても可い。

クレシチ

何も、彼樣な奴等と話すこたァ無えからな。

ペペル

そりや彼奴等は醉漢さ。だが、汝よりは悧巧だぜ。

ブブノフ

醉漢で悧巧者ぢやァ、まァ、二つの德を持つてるやうなもんだね。

ペペル

サチンの言ひ草ぢや無えが、誰だつて、仲間のものに良心でも有つて呉
れゝば可いと思ふが、良心なんて七面倒くさいものを持つてちや、自分
の損だと言つてる……眞實な事だぜ。

(主婦の妹ナターシャ登場する。其の跡から手に杖を衝き、荷嚢を肩にし、帶に釜
と土瓶を下げた巡禮のルカ老人登場する)

ルカ　旦那衆！御機嫌よう！

ペペル　（駄を撫で）いよ、ナタちやん。

ブブノフ　（ルカに向ひ）旦那衆と言はれた事も有るが、それはもう往昔の事だ。

ナターシャ　この方は新客なのよ。

ルカ　そんな事はどうでも宜いのぢや。私はどんな惡漢でも敬つてるんだ。私

の考では一匹の蚤だつて惡いとは思はん。何うせ人間は皆な蟲類同樣に跳ねてるんだからな……。お、時に姐さん、私の居る處は何所ぢやね？

ナターシャ　（蜜所の戸口の方を指し）お爺さん、そこに御出なさい。

ルカ　これは有難う。私は何所へでも行けと云ふ所へ行きます……老人には、暖かな所でさへ有りや、もうそこが故郷ぢや。

ペペル　ナタちやん、お前、面白い爺さんを牽張つて來たもんだなア。

ナターシャ　えゝ、それはお前さんよりは面白い方よ……。時にクレシチさん、お前

さんのお神さんはね、臺所に居るんですから少し經つたら迎ひに來て下さいよ。

クレシチ

可也〳〵。行くよ。

ナターシャ

お前さん、これからは少し、お神さんを可愛がつておやんなさいな……もう、長い事はないんですもの……。

クレシチ

知つてるよ、

ナターシャ

知つてるつて、たゞ知つてるばかりぢや仕樣が無いぢや有りませんか。知つてる位なら、然うして上げなきや嘘ですよ。死ぬつて云ふ事を、お前

さん何と思つてるの。

ペペル

だけど、俺ア死ぬ事なんざ何とも思つてやしねえぞ。

ナターシャ

おやさう。豪氣だ事ねえ……。

ブブノフ

（舌打し）

チェー、何んて絲だらう、ボロ〳〵してらア……。

ペペル

本當に怖かなかねえんだ。いま死ねと言や、直にも死んで見せらア。お前まア、試に庖丁か何かで、一つ俺の心臓の所をグツト刳つて見ねえ、默つて死んで見せらア。そりや、ウンともスとも言やしねえ。言はねえばかり

か、悦んで目を瞑るんだ。なぜつて云ふと、可愛いゝナタちやんのお手に掛るんだからなア。

ナターシャ

（急に立つて）

おや、お前さんとんだ所へ話を持つて行つたのね。

ブブノフ

（うんざりした様に）

ちえッ、何て絲だい。

ナターシャ

（玄關への出口から）

クレシチさん、お神さんを迎ひに來る事を忘れちやいけないよ。

クレシチ

可也〳〵。

ペペル

好い女だなア。

ブブノフ

惡くはねえな。

ペペル

なぜ彼女は俺らに彼樣つんけんしやがるだらう。嫌つてゐやがるな……ふん、あんなにして居たつて、いまにだい無しになつちまうからな。

ブブノフ

お前がだいなしにするんぢやねえか。

ペペル

そんな事が有るもんか。俺ア彼女を可哀想だと思つてる位なんだ。

ブブノフ

狼が羊を可哀想に思ふ様にだろ。

ペペル

嘘を云へ。俺ア彼女をこんな處に置くなア惜いと思つてるんだ。彼女の益にやならねえからな。俺にやもう、前途がちやんと見え透いてる。

クレシチ

ふん、彼女と話して居る所を、ワシリーサに見付かつたら何うだらう？それこそ騒動だ！

ブブノフ

ワシリーサがか？何を言つてるんだ。彼女はお前、ただでころぶ阿魔ぢやねえせ。あの阿魔アたゞ者ぢやねえ。

ペペル

（庭壇に横ばり）

なにを言つてやがるんだ。煩せえ、彼方へうせあがれッ、此の陰陽師！

クレシチ

まあ、見てるがいゝさ！

（壇所の方から、ルカ老人の歌ふ聲聞ゆ）

「夜半に道も見え分かず……。」

クレシチ

（玄關に出る）

なんだ、吼えてゐやがらア……。

ペペル

あゝ厭だ……。何だつて斯う憂鬱するんだらう。何の氣なしに冗談を云つてたかと思ふと、直ぐ引込まれる様に氣が滅入つて了ふ。淋しくつ

て仕様がねえ。

ブブノフ

淋しい？然うだらうよ。

ペペル

笑談ぢやねえ、本當の事を言ふんだ。

ルカ

（又歌ふ）

「あゝ道も見えわかず……。」

ペペル

やい、爺さん！

ルカ

（戸口から首を出し）

私を呼びなすッたね。

ペペル

おい、唄なんか止して呉んねえ。

ルカ

（登場して）

嫌ひかな？

ペペル

上手に唄ふんなら好きだが……。

ルカ

さうすると、私の唄は下手ぢやね。

ペペル

まア、さうよ。

ルカ　自分ぢや上手に唱つてるつもりだがね。萬事皆な斯うしたものぢや。人間といふものはな、自分のする事は何でもいゝ事と思つてるが、それが大間違ひ。世間の人は皆な惡く思つてゐるものぢや。

ペペル　（笑ひつゝ）そりや爺さん眞實のこッた。

ブブノフ　淋しいなんて言ひながら、彼樣なに笑つてやがらァ。

ペペル　何だと？ひよつとこ烏！

ルカ

淋しいてのは誰だね？

ペペル　俺がさ。

（男爵登場する）

ルカ　お前さんが淋しい？彼處でね、臺處でさ、娘兒が本を讀んで泣いてをるのぢや、涙を流してな……。そこで私が、これ姐さんや、何を其樣なに泣きなさると訊くと、この本の中に書いてある事が可哀想でならないと云ふのぢや。お前さん娘兒はまア何をしてゐると思ひなさる？本を讀んでゐるんぢやないか。それでも矢張淋しいには勝てないのぢや。

男爵　彼女か、彼女は馬鹿だ。

ペペル　やい男爵茶を飲つたか。

男爵　飲んだ、それが何うしたんだ。

ペペル　火酒を一罎奢るが、欲しかァねえか。

男爵　きまつてるぢやねえか……それで。

ペペル　だから四ん這ひに匐つて、ちんころの眞似をして吠へねえか。

男爵　馬鹿野郎！　お前商人にでもなつたのか、それとも酩酊ッたのか。

ペペル　まア、吠へろよ！　そうすると俺らの氣慰みにならァ。汝え御前様で俺達仲間を人間とも思はなかつた時があらう、まアそれと同じ理由よ。

男爵　ウン、解つた。それが悪いッてのか。

ペペル　悪いつてんぢやねえが、今日は俺様の方で汝に犬の眞似をさせて、吠へさせて見やうッてんだ……やるかどうだ？

男爵　やれと言や、やるさ！　間抜奴。俺ら今ぢや汝より劣等さ、だから今俺にそんな事させたつて、なにが面白いんだ。俺がまだ汝の上に立つて居た時四ん這なり何なりさせたら、そりや面白かつたかも知れねえが、今ぢや

何んでもねえや。

ブブノフ　眞實だ。

ルカ　私もさう思ふがね。

ブブノフ　過ぎたこたア仕方がねえや。つまらねえ。此處へ來ちや主人も家來もねえんだ。そんなこたア皆な消えちまつて、たゞあるものは、はア裸體の人間樣だ。

ルカ　さうすると皆なが平等だね……。時にお前さんは本當に男爵さんだつたのかね？

男爵　なにを吐すんだい、お前こそ一體何物だ、怪物か？

ルカ　（笑ふ）伯爵にも逢た事があり、御大名にもお目にかゝつた事はあるが、男爵には生れて始めてぢや。それも零落男爵にはな。

ペペル　（カラ〳〵笑ふ）やい、男爵！汝俺に一本喰はしたな……。

男爵　可い加減にして馬鹿な事は止しねえな！

ルカ

へッ、、、私は斯うしてお前さん達の爲る處を視て居るがね、どうも、こんな生活をしてゐるかと思ふと實に驚いて了ふ。

ブブノフ　然うよ、朝起きると空腹を抱へて譯もねえ事をワイ〳〵言ひ合つて、其日を送つてるだけさ、之が俺達の生活なんだ。

男爵　これでも往昔は立派に暮して居たものだ。朝に目を醒ますと、臥床の中へコーヒーを持つて來る、それも牛酪の入つた奴をよ。

ルカ　人間は皆な其樣なものさ。どんなに澄した顏をしても、どんなに威張り込んで見ても、やッぱり人間で生れて人間で死ぬだけの事ぢや。私は恁うして見てるのに、人間はたとへ貧乏な生活をして居ても、悧巧な奴は

始終働らいて居るが剛情張になると、何時も善いことばかりを夢見て居る！

男爵　やい爺！お前一體何者だ。何處から遣つて來たんだ！

ルカ　私かい？

男爵　巡禮だらう！

ルカ　私等は地の上に住んで居る間はみんな巡禮さ。話に聞くと、私共の住んでゐる此の地球も空中にぶらついて居るさうで、まあ謂はゞ巡禮のやうなものぢや。

男爵
（語氣を強めて）
そんな事はどうでもいゝや。お前どうだ、旅行券を持つてるか？

ルカ
（少時默って）
時に、お前さんは誰人だね、探偵かね？

ペペル
（得たり顏に）
爺！うまくやつたな！見ろい男爵、汝一本喰つたらう。

ブブノフ
ちげえねえ、一本まいつた本

男爵

（きまり惡そうに）
なにがよ、時に爺さん！俺ら笑談を言つて見たんだ。然う言ふ俺だつて、實の處旅行券なんか持つてゐねえんだ。

ブブノフ
嘘吐け！

男爵
成程……俺ア持つちや居るが、そりや何の役にも立たねえんだ。

ルカ
旅行券なんてものは、皆な同じもんでね。何の役にも立ちやしない。

ペペル
おい男爵、酒屋へ行かう。

男爵

よろしいッ！さア行かう、左様なら、老爺……お前は人が悪いね。

ルカ　世の中には、種々の人間があるからなア。

ペペル　（戸口にて）

さア行かうてば、何をしてやがるんでい。（退場する）

（其後から男爵そ〜くさと蹤いて行く）

ルカ　あの人は本當に男爵かね。

ブブノフ　其様な事が分明るもんか。だが、旦那衆だつたのは眞實らしい。今でも彼奴、屢〻旦那の癖を露すからなア、まだ拔けきらねえものと見える。

ルカ　旦那衆の癖といふものは恰度天然痘の様なものでな、病氣が癒つても、痕が殘るからね。

ブブノフ　如彼、見えて彼奴も可愛い人間さ。たゞ屢〻さつきの様な旅行癖を何うしたなんて言ひたがる病があるばかりさ。

アリョシカ　（ハーモニカを手に持ち、酩酊つて登場する、ハーモニカを吹く）

やい同胞！

ブブノフ　何を吠えやがるんでい？

アリョシカ

御免ねえ……勘忍しねえ！俺アこれでも、禮義てものを心得てる人間だ

ブブノフ

また泥酔やがつたな。

アリョシカ

何物でも持つて來やがれ。俺アねたつた今警察の副署長のメヂャキンに警察から引張られて來たんだ。野郎、俺に此様な事を吐かしやがる、街中を彷徨いちや可けねえ、一寸でも影を見せちや可かんなんて……。憚りながらそんな弱蟲ぢやねえ……。此處の亭主奴、俺を嫌やがるが、亭主なんて何だ？馬鹿にするない。彼奴こそ飲んだくれぢや無えか……。俺らは斯ういふ人間だ、何をするのも厭なんだ、たゞ厭なんだ、一兩呉れても、二十兩呉れても厭なものは厭だ。俺の仲間の酔漢が……俺の

やうな善人を指揮するのを俺ア厭だ、厭なんだ！。

（ナスチャ戸口に立ち、アリョシカを見て首を振る）

ルカ

（優しく）

あい、若い衆、見當違ひな事をするんぢや無いよ……。

ブブノフ

こゝいらが人間の馬鹿な所さね。

アリョシカ

（床の上に寝轉んで）

俺を喰殺したきや喰殺すがいゝ、俺ア何にも要らねえんだ。要らねえつたら要らねえんだ。俺らは元から向ふ不見の人間だ。向ふ不見だつて、他人より悪いと云ふ法はあるめえ。悪いッて云ふなら、其悪い點を云つて

見ろ、何處が他人より劣つてるんだ。メヂャキン奴、俺らに市街を彷徨いちや可けねえと吐かしやがつた。彷徨くとはり飛ばすと吐かしやがつた。箒棒奴、其様な威嚇を聽いてる俺ぢやねえ。出掛けてやらア。出掛けて、往來の眞中へ大の字に臥て見せらア、張飛ばすなら張飛ばして見ろ、俺らそれでも構はねえ。

ナスチャ

可哀想にね、まだ若いのに、もう彼様にひがんで了つて。

アリョシカ

（ナスチャを見つけて急に膝を衝き）

お嬢さん、令嬢さん、ミス！メリーメリー、俺ア泥酔つちやつた。

ナスチャ

（聲高く）

お神さん。

ワシリーサ

（倉皇入つて來る、アリョシカに向ひ）

お前、また此處へ來たね。

アリョシカ

今日は！まアこちらへ！

ワシリーサ

なんだ青二才！私やもう二度と再び此處に來ちや可けないッて言つたぢやないか……。それを又圖々しくやッて來るなんて。

アリョシカ

お神さん、お葬ひの聖歌を一つ奏つて聽かさうかね。

ワシリーサ

（アリョシカの肩を突き）

さつさと出てお行で！

アリョシカ

（戸口に出かゝり）

待ちねえ、其様な亂暴な眞似アしなくッてもいゝぢや無えか。俺ア此頃憶えた埋葬式の歌を唱らう、まだ口開けのほや〳〵だ……。おい、待ちなッてばな……。亂暴しなさんなよ。

ワシリーサ

何て云ふ強慢い奴だらう、可けないと云ふに……。宜い、私は市中を觸れてやるから然うお思ひ、碌でなし奴、青二才のくせに、私の事を何のかんのつて生意氣な……。

アリョシカ

（逃げつゝ）

いゝぢやねえか、俺が出て行つたら文句はあるめえ。

ワシリーサ

（ブブノフに向ひ）

彼様な奴に、此處の閾を跨がしちや可けないよ。いゝかい、解つたかい？

ブブノフ

ふん、俺らだつて汝の門番ぢやあるめえし！。

ワシリーサ

そりや、お前さんは番人だか番人でないか、私の知つた事ぢやないさ。無いけれど、お慈悲で此處に住んでゐる事を忘れちや濟むまい。本當に幾許借金があると思つて居るんだ？

ブブノフ

（平氣に）

幾何だか、其様な事を勘定して居る奴があるもんか。

ワシリーサ

態ァ見ろ、お前が勘定しないでも、私はちやんとしてゐるよ。

アリョシカ

（戸を開けて叫ぶ）

山の神、俺はな、憚んながら、汝えなんか怖かなかァ無えよ、些とも怖かな

かァねえよ。（と身を隠す）

（ルカ老人笑ふ）

ワシリーサ

お前さん、何者だね？

ルカ

通りかゝりの者ぢや……旅人ぢや……。

ワシリーサ

一晩泊りかい、それとも暫らく滞在するのかい？

ルカ

まァ様子を見てからの事ぢや。

ワシリーサ

旅行券は！

ルカ

持つてる。

ワシリーサ

どれ、お見せ！

ルカ

あとで持つて行く……お前さんの宅へ持つて行くよ。

ワシリーサ

しやらくさいね、通りかゝりの者だなんて、流浪者だと言へばいゝに：

……其方が眞實らしいよ……。

ルカ

（嘆息して）

まアー！お神さん、お前さんは酷ひ人ぢやねえ。

（ワシリーサはペペルの部屋の入口へ行く。アリョシャは奎所より首を差出し「行きアがつたのかい！」と私語く）

ワシリーサ

（振向いて）

お前まだ其所邊に愚圖々々してるのかい？

（アリョシカ隠れながら舌打する、ナスチャとルカ笑ふ）

ブブノフ

（ワシリーサに向ひ）

奴は居ねえよ。

ワシリーサ

誰がさ？

ブブノフ

定まつてらア、ペペルがよ。

ワシリーサ

誰がお前にペペルの事を訊いた？

ブブノフ

解つてらアな……汝え、其所邊中きよろ〳〵見廻はしてるぢやねえ

か。

ワシリーサ　私はね、検査して居るんだよ。お解りかいなんだつて今まで掃除もしないんだね。部屋を清潔にしろと、口の酸つぱくなる程命つたちやないか。

ブブノフ　今日は役者の掃除番だい。

ワシリーサ　誰の番だか、そんな事は何うでもいゝよ。若しか衛生係でも來てさ、罰金でも取られたら何うするか。そしたらお前達を皆んな追ッ拂ッてしまうからね！。

ブブノフ（平氣に）

そんな事したら、それこそ汝の方が喰つて行れめえ？

ワシリーサ　なんでもいゝから、まア塵埃のない樣にしてお置き！（臺所へ行き、ナスチャに向ひ）お前なにを茫然突起つてるんだい、其樣眼れッ顏をしてさ。まるで棒を呑んだ樣ぢやないか！。さッさと板の間を掃除おしよ。だが、お前、ナタリヤを見なかつたかい、彼女は此處に居たんぢやないの？

ナスチャ　知りませんよ……私見ないんですもの。

ワシリーサ　ブブノフさん、妹は此所へ見えなかつたの？

ブブノフ　ナターシャは今あの人を連れて來たッけ……

ワシリーサ　彼人……家に居たの？

ブブノフ　ペペルか？居たよ……ナターシャは此所でクレシチと話し込んで居たッけ……ナターシャは……。

ワシリーサ　妹が誰と話したなんて、そんな事を誰も訊きやしないよ。あゝ、なんて汚穢いんだらうね、まるで芥溜のやうだわ。お前達は……ほんとに豚だね、清潔にしろと云ふに、解つたかい。

（と急ぎ退場す）

ブブノフ　あの阿魔、なんて悪性だらう！

ルカ　邪見な女だね……。

ナスチャ　お神さんの様にあんな亭主にくつ着いて居た日にや、誰だつて悪性になりますよ……。

ブブノフ　ところが彼女、そんなに甚く、くつ着いてる譯でもねえぜ。

ルカ　彼の女はいつもあゝ憤々してるのかね。

ブブノフ　いつもよ、彼女今、情夫ん所へやつて來たのさ。ところが情夫が居ないだらう……。

ルカ　なるほど、それで八方當りと來たんぢやね。世の中には種々〳〵違つた人間が幾許も散らかつて居て……それがいろ〳〵と、恐ろしい事を言ふてはお互ひに威嚇し合つて居るが、それでも矢張人間の生活と云ふものはだらしがなくつて穢れて居るからなア。

ブブノフ　誰でも皆んな締のある樣にと思ふんだが、智惠が足りねえんだ。まあ、そんな事はよしとして、掃除をしなけりやならねえが……。おい、ナーちやん……お前忙しいかね！。

ナスチャ　なんの事だね、私はお前さん達の下女ぢやあるまいし！（と暫時默つて）今日こそ私酩酊つて見せるから、ぐでん〳〵に酩酊つて……。

ブブノフ　それもよからう。

ルカ　そりや、姐さん、なんの事だい、酒を飲むなんて。姐さんは先刻泣いて居たぢやないかね、それをいま急に酩酊ふなんて！。

ナスチャ　（つッかゝり氣味に）なに酩酊つてからまた泣くんさ、いゝぢやないか。

ブブノフ　可い加減にしねえよ……。

ルカ　なぜだか、理由をお話し、腫物だつて、なにか理由がなけりや出來るもの

ちやないからなア。

（ナスチャ首を振り默す）

ルカ

へッ、、、、お前さん達は、いまに如何なる事じやらうな。さア俺が掃除をしてやらう。箒は何處だね。

ブブノフ

玄關の戸の陰にあらア。

（ルカ玄關へ行く）

ブブノフ

ナーちやん！。

ナスチャ

え！。

第二幕

Andante molto tranquillo.

(Solo)

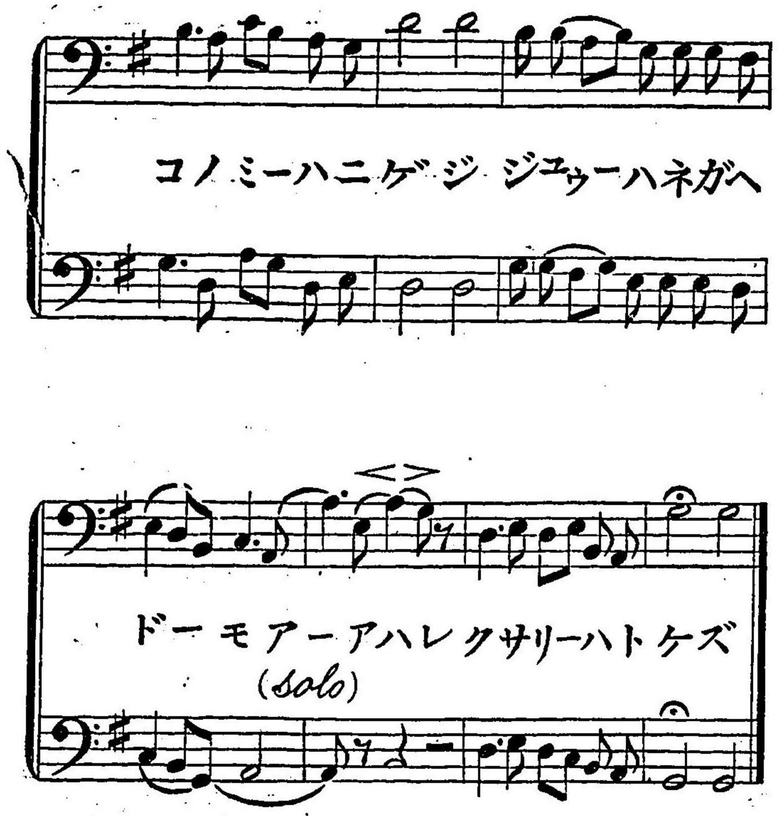
ヒハイデテシズ ム ヒトヤーハクラシ

アケクレラウモ リ ー ハ ア ー アハレ

(Solo)

(Solo)

ワガマドマモ ル マモラバマモ レ



ブブノフ　なんだつて、ワシリーサはあんなにアリョシカに突掛つたゞか、お前知らねえか。

ナスチャ　そりやね、こうなんだよ、アリョシカが方々へ行つてね、お神さんの事を、ペルが愛想を盡かしたとか、捨てたとか、妹の方に心變りしたとか言つて歩くからさ……私最う斯様な宿屋に居るのを廢して他の宿屋へ行かうと思ふの！。

ブブノフ　奈何して？何處へ？

ナスチャ　どこつて。此處は最う厭だもの……それに此處ぢや私は餘計もんだ

しするから……。

ブブノフ

（落着いて）

何處へ行つたつて、お前は餘計もんさ……。それに、世の中ぢや、どんな人間だつて皆な餘計もんなんだ……。

（ナスチャ首を振りつゝ起上り、靜かに玄關へ行く。同時にメドゥウエデフ登場する。其の後より籐を持ちルカ入來る）

メドゥウエデフ

なんだか俺ア貴樣の顏を見た事がないやうだね。

ルカ

あとの者は皆んな知つて居るのか？

メドゥウエデフ

自分の管内だけは皆な知つて居なけりやならんだが貴樣だけは始めてだ。

ルカ

お爺さん、そりや其の筈だて。世界が皆んなお前さんの領分ぢやないからねえ……お前さんの少ッぽけな分署なんか、てんで話にならないさ、其外に……。

（と室所へ去る）

メドゥウエデフ

（ブブノフの所へ行きながら）

眞實だ、俺のとこの分署なんぞは少ッぽけなものさ……。其癖他の大きな所よりも用が多くてな……只今も當番と交代になるまへ靴匠のアリョシカを拘引つて行つた處さ。彼奴にも呆れるぢやないか、市街

の眞中へ横そべつて、ハーモニカを吹いてけつかる。なに言ふかと思や、何も斯も厭だ〳〵と呶鳴つて居るのさ。馬は馳走るし、往來は激しいし、車の下にでもなるとか或はなにか間違でもあつたらどうするんだらう。亂暴な若者さ……。それでたつたいま彼奴を分署へ屆けて來たのさ。馬鹿にまた亂暴の好きな奴もあつたものさね……。

ブブノフ

おい。晩に將棋を指しに來ねえかい。

メドゥウェデフ

可也、來るとも。はてな……、ペペルは奈何した？

ブブノフ

奈何もしねえよ……相變らずだ。

メドゥウェデフ

では……生きてるな

ブブノフ

生きねえで、どうする？奴、仲々ものだからな

メドゥウェデフ

（怪訝相に）

仲々者だつて？（ルカ手桶を下げて玄關へ行く）ウム、ペペルの事に就いちや專ら評判だが、貴樣聞いたことはないか？

ブブノフ

聞いたとも、俺ら色んな話を聞いたよ。

メドゥウェデフ

ワシリーサの事に就いて、なにか氣が付いた事はないか。

ブブノフ

なにをよ？

メドウェデフ

なにつて……別に定まつちや居ないさ……貴様知つてる癖に空呆けるなよ。世間ぢや皆んな知つてるぢやないか……（と威嚇ぶり）おい隠しちやいかんぞ。

ブブノフ

なんで俺が隠すもんか！。

メドウェデフ

それならいゝが！世間の没暁漢はペペルとワシリーサの事を頻りに噂さして居るんだよ。勿論そんな事は俺の構つた事ぢやないさ。俺ア別に彼女の阿父と云ふぢやなし、たゞ叔父つて云ふだけの事だ。それだけの事に世間ぢや俺の所を嘲弄つて居るんだ。（クワシニャ登場す）まア人間たア

蒼蠅もんだ。なんでもかでも嘲弄さへすりや可いものと思つてけつかる……、やアお前、歸つて來たか……。

クワシニャ

厭な護衛さん！此人ねえブブノフさん、今日もまた市場でしつこく私に膠着いて來てさ、嗅になれと言ふぢやないか……。

ブブノフ

なればいゝぢやないか。此人にやお金はあるし、それに身體もまだ確かりして居らア……。

メドウェデフ

俺かね？ハ、、、、、

クワシニャ

お前さんはなんて野暮なんだらう！そんな事言つて私の急所を衝い

ちやいけないよ。お前さん私は經驗があるがね、婆が嫁に行くのは、嚴冬氷孔に跳び込むと同じ事で、一度行つたが最後一生それつきりだからね。

メドウェデフ　おい待つた〳〵、一概には言へない。亭主にも種々あるぜ。

クワシニャ　そりやそうだけど、私に取つちや皆な同じだからねえ。私の亭主が死んだ時其お葬式の濟むか濟まないうちに、最う私は嬉しくつて全一日座り通して居ましたよ。こんな嬉しいことは夢ぢやないかと思つた位ですよ……。

メドウェデフ　亭主が無暗にお前を毆つたんなら警察に訴へればよかつたに……。

クワシニャ　私八年も神様に祈つたのだけど、なんの效能もなかつたわ。

メドウェデフ　今ぢや嗅を毆つたりする事は禁じてあるんだ。どんな事でも嚴重な法律と云ふものがあつて、整然と規律が立つて居る。無暗に人を毆つたりすることは出來なくなつた。たゞ秩序を保つ爲に人を毆ることだけは許してある……。

ルカ　（アンナを連れて來て）まア奈何なさつたの、一人で匐ひ出したりしてこんなに身體が弱つて居るのに一人で歩くのはいけませんよ。お前さんの寢床は何處だね？

アンナ

（自分の寢床を指す）

お爺さん、有り難う御座います……。

クワシニャ

あれ御覽、あれでも亭主があるんだよ！

ルカ

此お婆さんすつかり弱りきつてゐるんだよ。それだのに玄關の方へ行つて、彼所の壁につかまつて、うん〳〵呼鳴つて居るぢやないか……。

ルカ

なんだつてお前さん達はこんな病人を一人で出すんだね？

クワシニャ

つい氣が付かなかつたんだよ。お爺さん、勘忍してお呉れ。彼女の附添は屹度遊びにでも出掛けたんでせう……。

ルカ

お前さん、笑ひごッぢやないよ。斯樣になつた者を打捨つて置くつて法があるかい。人間と云ふものは、どんなになつたつて、其れ相當の價値はあるものじや……。

メドゥエデフ

看護して遣らなきや可けない。突然死にでもして見ろ、それこそ、つまらん事から、審査の何のと七面倒臭い事になる！

ルカ

眞實ぢや、署長さん……。

メドゥエデフ

ウム……俺はまだ……署長と云ふ譯でもねえがな……。

ルカ

そうかね、見た所ぢや大變偉らさうだから！。

（玄關の方に當り騷ぎ聲と足蹈の音聞ゆ。續いて消魂ましい叫聲）

メドゥウェデフ

亂痴氣騷ぎでも始まつたかな。

ブブノフ

さうらしいぜ……。

クワシニャ

行つて見てお遣り……。

メドゥウェデフ

俺は兎に角行かなきやならん……職務だから仕方がない！なんだつて人が喧嘩をするのに傍から罷めさせるんだらうね。疲れちまへば自分で勝手に止すんだから、やりたいだけやらせて置けば可いんだ。さうすりや銘々痛い思ひをして喧嘩もだん〳〵少なくならうと云ふも

のだ……。

ブブノフ

（寢床より出で）

そんならお前其事をお上に言へばいゝに……。

コスツイリョフ

（慌忙しく戸を開けて叫ぶ）

おい、メドゥウェデフ！早く來て呉れ。ワシリーサがナターシャを殺さうとして居るから、早く〳〵。

（クワシニヤ、メドゥウェデフ、ブブノフ玄關へ駈出す。ルカ其後を見送りながら首を振る）

アンナ

あゝ、あゝ……可哀想にナタちやんは！

（玄關の方に當り騷ぎ聲と足蹈の音聞ゆ。續いて消魂ましい叫聲）

メドウエデフ

亂痴氣騷ぎでも始まつたかな。

ブブノフ

さうらしいぜ……。

クワシニャ

行つて見てお遣り……。

メドウエデフ

俺は兎に角行かなきやならん……職務だから仕方がない！なんだつて人が喧嘩をするのに傍から罷めさせるんだらうね。疲れちまへば自分で勝手に止すんだから、やりたいだけやらせて置けば可いんだ。さうすりや銘々痛い思ひをして喧嘩もだん〳〵少なくなならうと云ふものだ……。

ブブノフ

（寢床より出で）

そんならお前其事をお上に言へばいゝに……。

コスツイリョフ

（惶忙しく戸を開けて叫ぶ）

おい、メドウエデフ！早く來て吳れ。ワシリーサがナターシャを殺さうとして居るから、早く〳〵。

（クワシニャ、メドウエデフ、ブブノフ玄關へ駈出す。ルカ其後を見送りながら首を振る）

アンナ

あゝ、あゝ……可哀想にナタちやんは！

ルカ　彼所で喧嘩して居るのは誰だね？

アンナ　お神さん姉妹さ……。

ルカ　（アンナの所へ近寄り）何うかしたのか？

アンナ　なアに、兩方とも……なにも不足がなく……壯健だからさ……。

ルカ　お前さんの名はなんと言はッしやる？

アンナ　アンナつて云ふんですよ……私お前さんを見てると……阿父さんによく似た所があつてよ……。お前さんはなんて優しい、親切な人なんでせうね。

ルカ　大變苦勞したから、それで角が取れたのさ。

（と嗄枯聲にて笑ふ）（幕）

舞臺面凡て前幕と同じ。晩方。据付煖爐の傍の寢臺にてサチン、男爵クリウォイ・ゾーブ、鞦韆人の四人賭博に餘念なき有樣。クレシチと役者之を眺め居る。ブブノフは自分の寢臺の上にてメドゥウェデフと將棋を指す。ルカはアンナの寢床の傍の床几に座し居る。木賃宿は二個の洋燈に照さる。一は骨牌を戲り居る人々の傍の壁に掛り、一は、ブブノフの寢臺の上に掛る。

鞣鞄人
最う一度戯らう……さうしてそれでお罷めだ。
ブブノフ
やい、ゾーブ唄を歌はねえか（と唄ひ出す）
『日は出でゝ沈む……。』
クリウォイ・ゾーブ（其後を受けて）
『牢屋は暗し……。』
鞣鞄人
（サチンに向ひ）

さア、骨牌札を切らねえか、巧くなア！俺等は汝をよく知つてるからな。
ブブノフ
ゾーブ
（聲を和して）
『明暮牢守はーあゝあはれー吾窟監守る。』
アンナ
一生毆られたり……苛められたりした外に……私は何にも……
何にも此世の味を知らないのです！
ルカ
おゝ、お神さん！其様に嘆きなさんなよ。
メドウェデフ
何處へ指すんだい！しつかりしねえ！。
ブブノフ

ア、然うか〳〵……

鞋靼人

（サチンに拳固を向けながら）

やい、なんだつて花札を隠しやがるんでい。俺ァちやんと見てるからな、間抜奴！

クリウォイ・ゾーブ

放ッとけよ！アサン！どうせ俺等は負られッちまうんだ……。ブブノフ、歌を始めろよ！

アンナ

御飯だつて腹一杯食べた事なんかありやしないんですよ……。パン一片食べるんだつて却々ですもの……。私は一生びく〳〵して送つたのですよ……。他人様よりも多く食べたりしてはと心配ばかりし

てねえ……。着るものと云つたら補綴した襤褸ばかりですもの……私はなんて不仕合な生涯を送つたんでせうね……。何か因縁があるんでせうか？

ルカ

おゝ、お神さん疲れやしたかね。何も然う氣を落すこたァないよ。

役者

（クリウォイ・ゾーブに向ひ）

ヂャックを出せ……ヂャックをさ、馬鹿野郎！

男爵

こつちにやキングがあらア。

クレシチ

いつも負されるなア。

サチン
俺等何時だつてこうよ……。
メドウェデフ
そら、クインだ！
ブブノフ
俺も持つてる……さアどうだ……。
アンナ
あ、最う息が切れさうです……。
クレシチ
おや〳〵大變だ！　韃公！　骨牌を罷めつちめえな……おい、罷めろつたら罷めろよ。
役者

汝が居ないたつて、彼奴解らアな。
男爵
やい、クレシチ、氣を付けろッ、悪圖々々言やがると打倒すぞ。
韃靼人
最う一度配けろ、何うせ毒を飲むなら皿までだ。
クレシチ
（首を振りつゝブブノフの方へ立去る）
アンナ
私始終氣にして居るんですが、彼世へ行つても矢張私は苦しい思をしなけりやならないでせうか？　彼世でも矢張斯うなんでせうか。
ルカ
何にも有り、やしませんよ。氣樂に寢て居なさるが可い。彼世に行きさい

すりや息がつけます。もう少しの辛抱です……。誰んだつてそれ相應な苦みはあるものです。たゞそれをいろ〳〵と辛抱して行くんでさ。

（と立上り早足にて臺所へ去る）

ブブノフ（唄ひ始む）

『監視らば監視れ。』

クリウォイ・ゾーブ

『此身は逃げじ。』

（二人一緒に）

『自由は願へども――あゝあはれ――鐵鎖は釋けず。』

韃靼人

おや、花札を隱しやがつたな。

男爵

なにッ！じや汝の鼻ッ先きにでも突出して置けつてのか。

役者

（特に語氣を強めて）

やい、韃公、そりや汝の感違ひだ。誰もそんな事をしやしねえ。

韃靼人

俺ア現に見たゞよ、此の惡徒奴！俺アもう戯らねえ！

サチン

（骨牌札を集めつゝ）

やい、アサン！可い加減にしねえ。俺等が惡徒だつてこたア汝にや疾うから知れきつてるじやねえか。そんな事を今更思圖〳〵云ふ位なら始めつから戯らなけりやいゝに。

男爵

フン、たつた二貫位のことで三兩紙幣でも空徒にしたやうな騒ぎか……。さア鞴公最う一度戯るべえ……。

鞴鞄人

（眞赤になつて）

正直に戯らなけりや駄目だ！

サチン

何うして？

鞴鞄人

何うしてツてことがあるかい？

サチン

それだから……訊くんだ。

鞴鞄人

汝知らねえのか？

サチン

知らねえさ、汝は知つて居るか？

（鞴、鞄人怒り牀上に唾を吐く、一同ドッと笑ふ）

クリウォイ・ゾーブ

（温なしく）

アサン！汝も餘程變人だな。解らねえのか。此奴等が若し正直に暮した

ら三日も經たねえうちに餓死してしまわアな。

鞴鞄人

そんな事は俺の知つたこつじやねえ。何んでも斯んでも正直に暮さな

くつちやいけねえ。

クリウォイ・ゾーブ

又同じ事を言やがる。それよッかまアお茶でも喫みに行かう、此素寒貧。

『ア、鐵鎖、此の鐵鎖……。』（と歌ふ）

ブブノフ

『御身は鐵の牢守かよ。』

クリウォイ・ゾーブ

アサン！行かう！

（と立去りながら歌ふ）

『破れじ、切れじ。』

（鞋、靴人男爵に鐵拳を向けつゝゾーブの後に蹤いて退場する）

サチン

（男爵に向ひ笑ひつゝ）

おい閣下！また奇麗に味噌をつけやしたな。如何程教育があつても花

札を摺換へる譯にや可かんと見えるな……。

男　爵

（手を搖りながら）

畜生！遣り損ねつちやッた……。

役　者

そりや天才がねえからだ……。つまり自信と云ふものがねえからだ……。これがなくつちや何時まで經つたつて駄目々々。

メドウェデフ

俺んとこにやクインガ一つしきやねえが、貴樣んとこにや二つあるな！

ブブノフ

一つだつて凹むこたアありやしねえ、巧くさい指せばいゝんだ。

クレシチ
メドゥウェデフさん、御前さん負けたかね？
メドゥウェデフ
おゝきな御世話だ、默つて居ろ……。
サチン
五貫三百の勝だ！
役者
三百は俺の分だ……。だが三百貫つた處で仕樣がねえな。
ルカ
（臺所より出て來る）
鞋、靼人を負かしたな。それでウォドゥカでも飲みに行くんじやろ？
男爵

一緒に行くべえ！
サチン
お前さんが酩酊つた所を見てえもんだな。
ルカ
そりや、清醒の時よりか惡いさ……。
役者
爺さん行かうよ……。俺アお前にアーリアを唱つて聞かせるから。
ルカ
そりやなんだ？
役者
詩だ。
ルカ

詩だつてえ。私が詩を聞いて何うするのぢや。

役者　そりや面白えもんだよ……。時々悲しい處もあつてね……。

サチン　さア詩人行くんなら早く行かう。

（と男爵と一緒に出で行く）

役者　行くよ……。俺ア直き追着くから一足先きへ行つとくれ！お爺さん！今俺が唄ふから一つ聽いて見ねえ……。はてな初めの句を忘れッちやッたぞ……えーと、忘れッちやつた。

（と額を撫でる）

ブブノフ

しめた！お前のクインはやられたぞ……さあ指したり！

メドゥウェデフ　行き詰まつたかな……、しまつた！

役者　俺のオルガニーズムがまだアルコール中毒に罹らなかつた時分にや、俺ア記憶は確かだつたんだ……。が、今じや駄目だ、何も斯も駄目になつちやッた。俺が其の詩を讀むと、いつも大當りを取つて拍手喝采が雷の様だつたつけ。お前まだ拍手喝采と云ふ事は知るめえな……。それはまアちよいと言つて見るとウォドゥカの様なものだ……。まづ斯様な具合に舞臺へ出て行つて斯う云ふ鹽梅しきに立つんだ（と姿勢を造る）いゝかね、かう立つて……それから（と少時默つて）悉皆忘れッちやつた……一句も出て來やがらねえ……。其癖俺の好きな詩だつたがな

……是れぢや呆れッ了ふね、お爺さん……。

ルカ　そうさね、好きなものを忘れるなんて、其位ひ間抜けたことは滅多にあるものぢやない。全體好きなものには心が一杯籠もつて居なけりやならん筈のものだ。

役者　その心まで飲んじやつたから仕方がねえ……俺ア最うおしめえだなんだつてこんなになつたんだらう？俺にや自信と云ふものがなかつたからだ……。俺ア最うおしめえだ……。

ルカ　なに！さう失望したものでもないさ。お前さんお醫者にかゝるがいゝ。現今じや飲酒家を癒すことも出來るさうぢやから。解つたかね。それも

無料だで。飲酒家の爲にそんな病院が出來て、只で癒して呉れるさうぢやて。飲酒家も矢張同じ人間だと云ふことが解つて來たと見えて、癒して貰ひに行くと、そりや喜んでやつて呉れるさうぢや。何うだね、やつて見ては。まア行つて御覽！……。

役者　（思案に沈み）そりや何處だい？

ルカ　それは何とか云ふ町だつた……はてな、なんと云ふ町だつたッけねえ……。可也町の名は今に敎へるから……お前さん當分其の準備をするさ、少々我慢して酒を攝するさ……。それから醫者にかゝつてすつかり癒して貰うだ……。して、また舊の生活に歸るが可い……。い

いだらう……。さア早く何ッちかに決めたら何うだね。

役者　（微笑みつゝ）

また……新規播直しか……成程こりやいゝこッた……また、（と笑ふ）さア俺に出來るかね？どうだ、俺に出來るだらうか？

ルカ　出來ないてことがあるものか？行らうとさへ思や、人間にやなんでも出來る。

役者　（俄かに目が醒めたやうに）お爺さんも奇人だな！まア後にしやう、左様なら（と口笛を吹き）お爺さん左様なら。

（と退場する）

アンナ　お爺さん！

ルカ　なんだね、お神さん！

アンナ　お話して頂戴な……。

ルカ　（アンナの所へ近寄り）さアお話しませう。

（クレシチ周圍を見廻しながら無言にて妻の處へ近づき、妻を見詰て何事か言はんとして手眞似す）

ルカ　なにか用かね？

クレシチ　（低聲に）なんでもねえんだ。

（と徐かに出口へ行き少時アンナの前に立止りて偖退場する）

ルカ　（彼を見送り）お前さんの亭主は心苦しいと見へるな。

アンナ　私はもうそんな事を考へて居られないの。

ルカ

亭主はお前さんを毆つたかね？

アンナ　毆つたどころぢやありません……御蔭で斯様に痩せつちまひました……。

ブブノフ　俺の嗅奴……情夫を持つて居やがつたが、其野郎將棋を指すのが巧手でね、却々喰へねえ奴だつたぜ……。

メドゥウェデフ　うむ、さうか……。

アンナ　お爺さん、私と話をおしなさいよ。私なんだか催嘔くなりました……。

ルカ

そりやなんでもありやしない。死際にや能くそんな事があるものぢや、心配しなさんな……。死にさいすりや氣樂なものぢや……何も恐いことなんかありやしませんから。氣を靜めて安心して臥ておいで。死は人の氣を安めるものぢや……人間に取つて是位懷かしいものはないでね……能く死んで安息すると言ふが眞實だ。處が此世の中ぢや何處へ行つたつて、安息と云ふ事はないからねえ。

（ペペル入り來る。微醉の體。不興氣に戸の傍の寢臺に腰打掛け、凝つと思案に沈む）

アンナ　何うでせう、彼世に行つてもやつぱり苦しみがあるんでせうか？

ルカ　苦しみなんて些つともありやしないさ。安息と云ふものゝ外には何んにもないのぢやから、ちやんと然う信じてお出で！彼世に行つたら皆んながお前さんを神樣の御傍へ呼んで、主よ、あなたの婢アンナが參りました……ッて、言ふんだよ。

メドゥウェデフ　（茫々しく）だが、貴樣は彼世で其樣な事を言ふつて、どうして知つてるんだ、え？……。

（ペペル、メドゥウェデフの聲を聞き、首を擧げて、耳を澄つ）

ルカ　はァ署長さん！知つてるから言ふのさ。

メドゥウェデフ　（氣を和らげ）

ウン、さうか……そりや貴様が勝手に云ふのだな……だが俺アまだ〳〵署長じやねえ……。

ブブノフ　二つ取るぞ……。

メドゥウェデフ　やア畜生……やられた……。

ルカ　すると神様がお前さんを柔さしいお眼で御覽なさつて、斯うおッしやる、私は此のアンナを知つて居る、この女を天國へ伴れて行け、そして安息ませてやれ、私は此の女が婆婆で苦しんで……大層疲勞れて居るのを知つて居る……此のアンナを安息ませてやれ……、斯う神様が仰有るだよ。

アンナ　（息も斷えぐに）お爺さん……全く然うなら可いがね……。其の安息と云ふのが……なんにも感じないことなら宜いがね……。

ルカ　感じないですとも、何にも苦しいことなんかありやしないですよ。お前さん信仰が第一ぢや、信じなくちやいけません。喜んで往生するぢや……此の老爺が言ふがね、死は私共には恰度子供にお母さんと言つたやうなものさ……。

アンナ　だけど……若しか……私が癒つたら？

ルカ

（笑ひながら）

奈何して？又苦しみたいのか？

アンナ

え……最う少時生きて居たいの……ほんの少時。若し彼世に行つて苦しみがないのなら……此世でどんな苦みでも辛抱出來ます……眞實に出來ます！……。

ルカ

彼世には苦しみなんてありやしない！……空なものだ。

ペペル

（立ち上り）

眞實だ……だけんど嘘かも知れねえや。

アンナ

（恐れて）

あゝ……。

ルカ

やア美男子！……。

メドウェデフ

誰だい、呶鳴る奴は。

ペペル

（メドウェデフに近づき）

俺だ！どうしたと言ひやがるんでい？

メドウェデフ

無暗に呶鳴るなつてことよ。一體人間てものは、溫柔くして居なけりやならねえものだ……。

ペペル

なんだ……唐變木奴！それで叔父だなんて云はれるのかい、あきれつちまア、ハヽヽヽ。

ルカ

（ペペルに向ひ低聲に）

おい、おい、そんなに怒鳴りなさんな。こゝで女が死にかゝつてるんぢや最う脣には土色の含膿疹が出來た……。死ぬ邪魔をしちやいけない。

ペペル

爺さん、お前さん却々感心だよ。お前さんまだ若えね、欺しかたは巧えし……昔話も面白えやたんと欺しな……。此の婆婆にや面白えこたア全く無えからな！

ブブノフ

あの阿魔、本當に死にかゝつてるのか。

ルカ

本當よ、冗談ぢやないよ……。

ブブノフ

ぢや、是から咳をしなくなるな……。あの咳を聞くと實際氣持が惡いからな……。二つ取るぞ！

メドウェデフ

やアしまつた、こゝで一つ貴樣の本陣をドンとやれ……。

ペペル

やい、メドウ助ー

メドウェデフ

俺ア貴樣からメドウ助と言はれる憶えは無え……。

ペペル

ぢや、メドゥちやんか、メドゥちやん！ナターシャは病氣かね？

メドゥウェデフ

それ聞いてどうするんだ。

ペペル

奈何もしねえ。汝え言いさいすりや可いんだ。何うだ、ワシリーサはナターシャをひどく毆つたんか。

メドゥウェデフ

そんな事は貴様に關係がねえ。そりや他人の家内の事だ……。貴様は一體何者だ？

ペペル

俺が何者だつていゝぢやねえか……俺ア聞きてえから訊くんだ。汝

最う二度とナターシャを見るこた無えぞ！

メドゥウェデフ

（將棋を罷めて）

貴様、なにを吐かしやがるんだい。そりや貴様誰のこッた？俺の姪を何うしよッてんだい……此の泥棒奴！

ペペル

泥棒がどうしたつてんだ。汝達に捉まるやうな間抜ぢやねえや……。

メドゥウェデフ

待つてろ！俺ア捉まへて見せるから……今に……。

ペペル

捉まへるなら捉まへて見やがれ！それこさ汝一族の不幸だから。汝俺が裁判官の前で默つてると思つてるのか。まアどうなるか見てやがれ

裁判でな、誰が俺に竊盗させたか、誰が竊盗する場所を教へたかつて訊れたらコスツイリョフ夫婦だと言ふだけの事よ。また盗んだ物品を誰が取つたと訊かれたら矢張コスツイリョフ夫婦だと答へらァな。

メドゥヴェデフ

出鱈目言ふな。誰が貴様の言ふ事を信ずるものか。

ペペル

信じなくつて何うする、事實だもの。其時ァ汝も連累喰はしてやるから。フン、汝等を十把一束げに殺しちまうのは譯ァねえや、畜生奴、覺えて居やがれ！

メドゥヴェデフ

（夢中になり）

出鱈目言ふな……出鱈目……俺ァ貴様に何んな惡い事をした、此

の狂犬奴……

ペペル

だが、汝俺に何んな善い事をした？

ルカ

然うだ〳〵！

メドゥヴェデフ

（ルカに向ひ）

貴様なにを囀りやがるんだい。貴様の關係たこッぢやねえ、他人様の事だ。

ブブノフ

（ルカに向ひ）

放ッとけよ、なにもお前や俺が縄にかゝる譯じやねえんだ。

ルカ

（温柔しく）

私はなにも言つた譯じやない。只他人に善い事をしない者は良くない つて言つたゞけのことぢや……。

メドウェデフ

（其意を解せず）

何を吐すんだい……俺達は皆んな御互ひに知合だ……。が、貴様は一體何者だ？

（と怒り鼻息暴く急ぎ退場す）

ルカ

護衛さん腹が立つたんかい、へッ、、。お前さん達の事件はなんだか込入つて居ると見へるね！

ペペル

ワシリーサの所へ訴へに行きやがつた。

ブブノフ

おい、ペペル、汝能く悪戯をするね。何だつて汝そんな事に勢を出すんだい。勢を出すにや場所があらァな。山に菌狩にでも行つた時に出すんだい……。此處でいくら力氣んだつて何にもならねえよ……。彼奴等は汝の生首を捩折るかも知れねえぞ。

ペペル

馬鹿言へ、そんな事があるもんか。俺ア斯う見えてもヤロスラフの生れだ。そうお容易くは問屋で卸さねえや……。が、若しサアッて事になりや俺だつて默つて居ねえよ……。

ルカ

本當に若衆、お前さん此所を早く立退いたら何うですい。

ペペル　何處へよ、言つて見ねえ……。

ルカ　シベリヤへ行かッしやい！

ペペル　なんだい、冗談ぢやねえせ。俺ア政府の費用で流されるまでは、シベリヤなんぞへ行くもんか。

ルカ　悪い事は言はないから行かッしやい。彼處へさへ行けばお前さんどうにでもなるよ……。彼處ぢやお前さんのやうな人が要るんだから。

ペペル　俺の行く道は解つてるよ。兩親は一生牢屋で暮したし、俺もやつぱりさ

うなんだ……。俺が未だちつぽけな時分から皆んなは俺を泥棒だの、泥棒の子だのッて言つだんだ……。

ルカ　シベリヤと云ふけんど、そりや好い處ぢやて。黄金の邦ぢや力と智恵さいありや誰でも濡手に粟ぢや。

ペペル　爺さん、なんだつてお前何時も嘘ばつかり吐くんだ？

ルカ　はア？

ペペル　空恍けるない！なぜ嘘を吐くんだつてことよ、

ルカ

なんで私が嘘を吐くものかね？

ペペル　まるつきり嘘だよ。お前のやうに彼處も好い、此處も好いぢや何れが何うなんだか薩張解らねえや。

ルカ　まア私の言ふ事を信じて行つて御覽……そしたら私の言ふことが解るだらう……お前さん奈何して斯んな所にまご〳〵してるんだ？……。お前さん能く嘘吐け〳〵と言ふが何うして其樣に眞實が必要なんだね？考へて御覽、お前さんに眞實は邪魔物ぢやで……。

ペペル　俺ア何うでも宜い、邪魔物なら邪魔物でもいゝ……。

ルカ

お前さんも變人だね、奈何してさう捨鉢になるんだ

ブブノフ　なにを二人で思圖々々言つてるんだ。俺にや薩摩解らねえや……。ペペル！汝にどんな眞實が要るんだ。してそれを何うするんだ。汝自分の眞實を知つてるぢやねえか。他の人だつて皆な知りぬいて居らアな……。

ペペル　默つて居ろ、八釜敗い。俺ア爺さんの言ふのを聞いてるんだ……。何うだ、爺さん！神樣つて本當に在るものか。

（ルカ默して笑ふ）

ブブノフ　一體人間の生涯なんてものは、河に流れて居る木片の樣なものだ……

：家を建てやうとすると、木片は最う流れッちまつて居る……。

ペペル　何うだ神様つて在るものか、無えものか返事しねえか……。

ルカ　（低聲に）そりや信ずれば在るし、信じなければ無いさ……。なんでも信じて居る物は皆な有るんぢや……。

（ペペル黙いて凝つと老爺を見詰める）

ブブノフ　俺ア茶でも喫んで來やう……、おい喫茶店に行かねえか？

ルカ　（ペペルに向ひ）

なにをそんなに見詰めて居るんだね？

ペペル　何でもねえよ……まア待つた……なる程……。

ブブノフ　ぢや、俺一人かな……。

（と出口へ行く、ワシリーサと出會ふ）

ペペル　さうさね……お前……。

ワシリーサ　（ブブノフに向ひ）ナスチャは家に居るんかい？

ブブノフ

居ねえよ……。

（と退場す）

ペペル

やア……來やがつた……。

ワシリーサ

（アンナの所へ行き）

まだ生きてたんかい？

ルカ

かまいなさんな。

ワシリーサ

お前さん……なんだつてそんな所に居るんだ？

ルカ

居て惡けりや……何處へなりと行きますよ……。

ワシリーサ

（ペペルの部屋の入口へ行き）

ワシカさん、私はお前さんに一寸用があるんだがね……。

（ルカ出口の方へ行き、戸を開けてぴしやんと閉め、偖窃と寢臺に這ひ上り、亦寢臺より煖爐に上る）

ワシリーサ

（ペペルの部屋より）

ワシカさん……此處へお出でよ！

ペペル

行かねえ……厭だ……。

ワシリーサ

何うしたの？なにを其様に怒つて居るの？

ペペル

俺ア何だか面白くねえ……其様なくだらんこたア最う倦きくだ……。

ワシリーサ

さう……私も……倦きくしたわ。

ペペル

お前もか……。

（ワシリーサは頭巾を肩に曳卸し、雙手を胸部にあて、アンナの寢室の處に行き、竊と蚊帳の中を覗き再びペペルの處に戻る）

ペペル

さア……お話し……。

ワシリーサ

何を話すのさ！無理に愛想も造れまい……。お慈悲に可愛がつて下さいなんてことは私の性分ぢや言へないわ……。お前さん眞實の事を言つて呉れて有難う……。

ペペル

眞實のことッて何だ？

ワシリーサ

私、お前さんに厭がられたのさ……。これは眞實のことぢやないの？

（ペペル無言にて女を視詰る）

ワシリーサ

（男の傍へ寄り添ひ）

なにをそんなに視て居るのさ？見忘れたの？

ペペル

（太息しながら）

ワシリーサー お前は本當に別嬪だよ……。（ワシリーサ男の頸へ手を掛ける男は肩を動かし女の手を拂ふ）だがな、俺ア是迄お前に些ッとも打込んでは居なかつたよ……。斯うやつて一緒には居たが些ッとも可愛いゝと思つたことがねえ……。

ワシリーサ

（微かに）

さう？……それからどうなの……。

ペペル

それだけの事さ。他になんにも話すこたねえ、何にも無え……。最う歸

えれよ……。

ワシリーサ

他に氣に入つた女があるんだらう？

ペペル

お前の知つた事じやねえ……。氣に入つた女があつた處でお前を媒妁人に頼みやしめえし、安心しろ……。

ワシリーサ

（意味あり氣に）

そりや駄目よ……私媒妁人になるかも知れないわ。

ペペル

（怪訝な顏をして）

そりや誰の事だい？

ワシリーサ

お前さん知つてる癖に……おとぼけでないよ……私露骨の性分だからね……（と低聲に）なにも隱したりはしないがね……今までは一寸したことにも私を打つたり毆つたりして……そしては可愛がつて居るなんて言つて居てさ……今んなつて急に……。

ペペル

なにも急なこッぢやねえやな。俺の方では最う疾うからお前に愛想を盡かしてるんだよ……。一體女は情と云ふものが無けりやならねえんだが、其情がお前にや些少もねえんだ……。俺等は野獸見たいなもんだから情と云ふものが必要なんだよ……。女は男を情で以て馴らさなけりやならねえ……。所がお前は一度だつて俺を情で馴らした

例があるかい。

ワシリーサ

解つたよ……人間と云ふものは自分の事すら儘にならないんだから……厭だと云ふのも無理はないさ……承知しましたよ。それなら其つもりで居ませう……。

ペペル

それでお仕舞だ！何の騷ぎもなくて、圓く濟んだのは何よりだ！

ワシリーサ

まア一寸お待ちよ……。お別れになつたら、お別れになつたで好いけれど、私はお前さんと一緒になつて居る間、お前さんが何時か此私を今の苦界から救つて……亭主や叔父の手から自由にして呉れるものとばかり思つてたのだよ……。本當の所私はお前さんを可愛がつて

は居なかつたかも知れないさ……。だけどお前さんは私の此望みと此思ひを達げさして呉れる人だと思つて、それに惚れ込んで居たんですよ……解つたの？だから私はお前さんが私を連出して何所かへ行くんだらうと、そればかしを待つて居たのさ……。

ペペル

だつて、お前が釘で、俺が釘抜と云ふ譯ぢやあるめえし……。俺ァ又お前が甚麽悧巧者だらうかと思つた……。ね、お前悧巧者ぢやねえか……お前却々喰へねえ玉だよ……。

ワシリーサ

（近く男に身を寄せ）

ワシカさん……では二人で助けつくらをしやうぢやないか……。

ペペル

何うしてよ？

ワシリーサ

（低聲に而も力を込めて）

あの妹ね……。彼女はお前さんの氣に入つてるだらう……。私ちやんと知つてますよ……。

ペペル

それでお前は彼樣に酷く彼女を毆つたのか。憶えて居やがれ！彼女に手向ひしやうものなら承知しねえぞ……。

ワシリーサ

まアお待ちよ。そんなにお怒りでないよ。何でも水入らずに巧く行く事があるんだよ……。若し彼女がお氣に入るなら夫婦におなりよ。私、お前さんに最ッとお金を上げるから……。三百兩上げるからね……

もつと出來たら、もつと上るよ……。

ペペル

（後退りしながら）

待つた〳〵……そりや一體何うしたんだ？何の爲だ？

ワシリーサ

私をね……亭主の手から救つて頂戴な、私の體から此枷を解いて頂戴な、ね……。

ペペル

（靜かに舌打して）

おや、用心々々、仲々巧え事を考え付いたもんだ……。亭主は棺桶へ、情夫は監獄へ、後へ殘つた自分一人は……。

ワシリーサ

お前さん、なにも監獄へ行く事はないぢやないかね、お前さんが手を下さないだつて……誰か仲間の者にやらせりやいゝぢやないかたとへ自分で行つたにしろ、誰に知れるものかね。ナターシャに……まア考えて御覽！。お前さんの手にやお金が這入るしさ……何處へでも行きたい所へ行かれるんだ……。御蔭で私も一生自由の身となるし……それに妹も私の傍を離れることになるんだから、彼女の爲めにもいゝやね。私妹を見るのが苦しくつて堪らないの……お前さんの事から妹の顏を見るとむら〳〵ッとなつて……抑え切れないんですもの……。それで彼女を慘めたり毆つたりするんでさ……。そりや自分ながら可哀想だと思ふ位毆るんだよ……迚も毆らずにや居られないんだからね、是からだつて毆りますよ。

ペペル

畜生！自分の極悪なのを鼻に懸けて居やがらア。

ワシリーサ

決して鼻に懸ける譯ぢやないよ。眞實の事を言つてるんだよ。まア考えて御覽……お前さんだつて亭主の爲に……あの劫慾な亭主の爲に、二度も牢へ這入つたぢやないかね……彼奴は丁度南京蟲の樣に私の身體に食ひ着いて居て、最う四年も私の生血を吸ひ取つて居るんだよ。彼奴が私の亭主だなんて、何んな亭主だらう。それにナターシャを慘めたり、叱ツたりして、揚句には乞食だなんて言ふぢやないか。なんと云つたつて彼奴は皆んなの蜒蚰なんだわ……。

ペペル

お前も人の蔭口を言つて仲々な狡猾者だな。

ワシリーサ

私の話は誰にでも解つてるわ……私の心が呑み込めないのは沒曉漢ばかりさ……。

（コスツイリョフ癇かに入り來り、忍び居る）

ペペル

（ワシリーサに）

さア歸えれよ！

ワシリーサ

まアよツく考えてお置き。（と夫を見て）お前なにしに來たの？私に用があるのかい？

（ペペル飛び上りコスツイリョフを荒々しく見詰める）

コスツイリョフ

（嫉妬の情を燃やして）

俺だよ……俺だ！お前達は其所に……二人ッきりで居たのかえ……二人で話し込んで居たのかえ？（と微かに地太蹈んで聲高く叫ぶ）ワシリーサ、汝あきれた奴だな、此の破廉恥者！淫婦め！（兩人の沈默と不動の姿勢に對しコスツィリョフ餘りに自分の聲高きに驚き）ワシリーサ！汝また俺に罪を犯さしたな……。俺ア方々汝を探し廻つたんだ……。（と叫ぶ）最う寢る時分だぞ。燈明に油を注ぐのも忘れやがつて……あきれた奴ぢやねえか……え、此の乞食豚……。

（と妻に向つて寢へる手を振り揚げる。ワシリーサはペペルの顏を見つゝ徐かに出口へ行く）

ペペル

（コスツィリョフに）

やい！出て行きやがれ……。

コスツィリョフ

（叫ぶ）

俺ア主人だ。汝こそ出て行きやがれ、此の泥棒……。

ペペル

（微かに）

おい、出て行けッてば……。

コスツィリョフ

意張りやがんない。俺ア行かねえ……俺ア汝を……。

（ペペル彼の小首を捕へて動搖る。其時燈燈の上にて大きな叫喚と吼ゆるやうな欠伸聞こゆ。ペペル、コスツィリョフを放す、コスツィリョフ罵りつゝ出口へ駈け行く）

ペペル